

ナンバリング		授業科目名(科目の英文名)					区分・【新主題】/(分野)								
H030B101		情報科学(Statistics)					基礎系								
必修選択	単位	対象年次	学部	学期	曜・限	担当教員									
必修	1	1	福祉健康科学部理学療法コース	前期		氏名 徳丸治, 菅田陽恰, 江島伸興(非常勤)									
						E-mail ostokuma 内線 7972									
理学療法士として学術論文や専門書に記された数理統計的な情報を正しく理解し、また、レポート等に基礎的な記述ができることを目標とする。導入として、理学療法士と情報科学との関連性について、具体例を提示してその必要性和重要性について理解を深める。その上で、医療統計学の専門家を招いて情報科学の基礎から応用まで教授する。実際のデータを用いた演習形式を交えて、実践的な統計学の理解を目指す。															
具体的な到達目標															
						DP等の対応(別表参照)									
目標1	学術論文や専門書に記された数理統計的な情報を説明できる。					1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
目標2	レポート等への基礎的な記述ができる。					○	○	○		○					
目標3															
目標4															
目標5															
目標6															
目標7															
目標8															
目標9															
目標10															
授業の内容															
1 導入：理学療法士と情報科学との関係(菅田)															
2 資料の整理(江島・徳丸)															
3 確率変数とその分布(江島・徳丸)															
4 母数の推定(江島・徳丸)															
5 標本分布(江島・徳丸)															
6 統計的検定論：二標本検定(江島・徳丸)															
7 回帰分析(江島・徳丸)															
8 実験計画法(江島・徳丸)															
9															
10															
11															
12															
13															
14															
15															
ラーニング	A:知識の定着・確認 ○ 学生一人一人が表計算ソフトを操作する演習により、実践的な統計学の基礎を確実に理解することを目指す。 B:意見の表現・交換 ○ C:応用志向 ○ D:知識の活用・創造 ○					工夫		その他の							
時間外学習の内容と時間の目安	準備 配布資料や参考図書で講義内容の予習を行うこと(30h)。 事後 配布資料や参考図書で講義内容の復習を行うこと。特に配布資料中の課題の答案を作成すること(30h)。														
教科書	参考書を基に作成したテキストを配布する。														
参考書	浅野長一郎・江島伸興 基本多変量解析, 日本規格協会出版, 1995. Nobuaki Eshima, Statistical Data Analysis and Entropy, Springer, 2020.														
成績評価の方法及び評価割合	評価方法	割合	目標1	目標2	目標3	目標4	目標5	目標6	目標7	目標8	目標9	目標10			
	定期試験	50%	○	○											
	課題レポート	50%	○	○											
注意事項	集中講義として実施する。 受講時に各自ラップトップパソコンを持参すること(表計算ソフトの使用に慣れておくこと)。														
備考															
リンク															
	URL														

担当教員の 実務経験の 有無	○
教員の実務 経験	医師、理学療法士、高等学校教諭
実務経験を いかした教 育内容	医師、理学療法士、高校教諭としての実務経験をもつ教員が、臨床・研究・教育経験を生かし、情報科学の基礎から応用までを教育する。

ナンバリング		授業科目名(科目の英文名)				区分・【新主観】/ (分野)						
H0208111		解剖学Ⅰ (Anatomy I)				基礎系						
必修選択	単位	対象年次	学部	学期	曜・限	担当教員						
選択 (理学療法コースは必修)	1	1	福祉健康科学部	前期		氏名 紀 瑞成, 河上敬介 E-mail jisoita-u.ac.jp, kkawakani@oita-u.ac.jp 内線 7973 (紀), 7735 (河上)						
授業の概要 人体構造を理解するためには、細胞生物学、組織学、肉眼解剖学そして発生学という形態学の様々なレベルでの知識が必要である。本講義では、これらの学問を有機的に関連づけながら学習する。また、理学療法に重要となる骨、関節・靱帯、筋については、詳細な構造とともに働きも学び、他の器官との共通性と相違性について理解を深める。さらに、機能的、臨床的な関連性も含め講義することで、理学療法における解剖学の重要性を理解する。なお骨については、体表から触知できるランドマークに関して学習する。												
具体的な到達目標						DP等の対応(別表参照)	1 2 3 4 5 6 7 8 9 10					
目標1	人体の基本的構造について形態学の様々なレベルを説明できる。						○					
目標2	骨、筋、関節などの運動器系について、その詳細な構造、基本的な働き、他の器官との共通性と相違性について説明できる。						○					
目標3	細胞と組織の基本的構造および機能について説明できる。						○					
目標4												
目標5												
目標6												
目標7												
目標8												
目標9												
目標10												
授業の内容												
1 解剖学序論 解剖学用語、細胞・組織・器官・器官系 (河上)												
2 人体発生学 発生の概論 (胚子・器官系・胎児) (紀)												
3 組織学総論 (上皮組織、結合組織・軟骨組織・骨組織) (紀)												
4 組織学総論 (筋組織・平滑筋・心筋・平滑筋、神経組織、皮膚) (紀)												
5 組織学各論 (消化器・肝臓・脾臓・胃・小腸) (紀)												
6 組織学各論 (呼吸器・肺・気管、内分泌器・甲状腺・副腎) (紀)												
7 組織学各論 (循環器・心臓・動脈・静脈、造血組織、リンパ組織) (紀)												
8 組織学各論 (泌尿器・腎臓、生殖器・精巣・卵巣) (紀)												
9 組織学各論 (大脳・脊髄) (紀)												
10 骨学総論 (河上)												
11 骨学各論 (河上)												
12 関節学 (河上)												
13 筋学概論 (河上)												
14 筋学各論 (河上)												
15 体表解剖学総論 (ランドマーク) (河上)												
ラーニング	A:知識の定着・確認 ☐ 演習、小テスト B:意見の表現・交換 ☐ C:応用志向 ☐ D:知識の活用・創造 ☐					工夫	学生がより深く学ぶための工夫:オリジナルの写真等の資料や模型を用いて解説する。 その他の					
時間外学習の内容と時間の目安	準備 医学に用いる用語を初めて学ぶ講義となる。解剖学用語の意味が理解できないと、理学療法士の情報への入手は困難となる。そのために英単語を記憶した時と 事後 同様に、解剖学用語の記憶に費やす時間外学習は必須である。(約2時間) 野村雄編『標準理学療法学・作業療法学専門基礎分野解剖学 第5版』(医学書院, 2020)、牛木辰男『入門組織学 改訂第2版』(南山堂, 2013)											
教科書	金子丑之助原著『日本人体解剖学』19版上巻、下巻(南山堂, 2000) 伊藤隆『組織学 改訂19版』(南山堂, 2005) A.L.Kierszenbaum, 内山安男訳『組織細胞生物学』(南山堂, 2006) Sobotta, 藤田, 石村訳『実習人体組織学図譜第5版』(医学書院, 2005) 石村和敬, 井上貴央監訳『最新カラー 組織学』(西村書店, 2007) T.W.Sadler 著, 安田孝生 (訳) 『ラングマン人体発生学』(メディカルサイエンスインターナショナル, 2010)											
成績評価の方法及び評価割合	評価方法	割合	目標1	目標2	目標3	目標4	目標5	目標6	目標7	目標8	目標9	目標10
	講義中に実施する小テスト	30%	○	○	○							
	期末試験	70%	○	○	○							
	期末試験は60点以上を合格とする。											
注意事項	他学部との関係で、定められた曜日・時限以外の開講もあるので、開講1回目に渡す日程表に従って授業計画を立てること。											
備考	なし											
リンク	URL											

ナンバリング		授業科目名(科目の英文名)					区分・【新主題】/(分野)									
H030B112		解剖学Ⅰ実習(Practice of Anatomy I)					基礎系									
必修選択	単位	対象年次	学部	学期	曜・限	担当教員										
必修	2	1	福祉健康科学部	前期		氏名 紀 瑞成, 河上敬介, 川上健二, 菅田隆伸 E-mail ji@olta-u.ac.jp, kkanakani@olta-u.ac.jp 内線 7973 (紀), 7735 (河上)										
授業概要 細胞学・組織学実習と運動器系における肉眼解剖学実習を行う。細胞学・組織学実習では、解剖学Ⅰの講義で学んだ細胞や組織の構造を実際にプレパラート観察により理解を深める。肉眼解剖学実習では、医学部解剖学教室の協力のもと、実際の骨標本や液浸標本を用いて実施する。主に、骨、関節・韧带、筋について、各器官の詳細な形状を観察し、その形状の意味を考える。さらに、複数連体における骨標本や液浸標本を顕微鏡下で観察し、個々の共通点や相違点を学び、人体の多様性を学習する。なお骨に関しては、講義で学んだ体表から触知できる簡単なランドマークに関して触診実習を行う。																
具体的な到達目標																
DP等の対応(別表参照)																
目標1	上皮組織、結合組織、筋組織、神経組織の基本構造を説明できる。					○	○	○								
目標2	主な器官の構造的特徴を説明できる。					○	○	○								
目標3	運動器系については、各器官の位置や器官中の各部位の名称を説明できる。					○	○	○								
目標4																
目標5																
目標6																
目標7																
目標8																
目標9																
目標10																
授業の内容																
1	組織学実習ガイダンス(組織学実習とは、顕微鏡の使い方など)(紀)															
2	組織学実習(上皮組織、結合組織—軟骨組織、骨組織)(紀)															
3	組織学実習(筋組織—平滑筋、心筋、横紋筋、神経組織、皮膚)(紀)															
4	組織学実習(消化器—肝臓・膵臓・胃・小腸)(紀)															
5	組織学実習(呼吸器—肺・気管、内分泌器—甲状腺・副腎)(紀)															
6	組織学実習(循環器—心臓・動脈・静脈、造血組織、リンパ組織)(紀)															
7	組織学実習(泌尿器—腎臓・膀胱、生殖器—精巣・卵巣)(紀)															
8	組織学実習(大脳・脊髄)(紀)															
9	肉眼解剖学実習ガイダンス(解剖学実習とは、解剖学実習の環境と心得)(河上)															
10	骨学実習(1)(河上、川上、菅田)															
11	理学実習(2)(河上、川上、菅田)															
12	関節学実習(1)(河上、川上、菅田)															
13	筋骨実習(1)(河上、川上、菅田)															
14	筋骨実習(1)(河上、川上、菅田)															
15	身体部位・体表観察(河上、川上、菅田)															
ラーニングゴール	A:知識の定着・確認 B:意見の表現・交換 C:応用志向 D:知識の活用・創造	○ ○ ○ ○	小テスト、口頭試験、グループでの共同作業、グループ発表					工夫その他の	人体液浸標本を用いて解説する。							
時間外学習の内容と時間の目安	準備 事後 学修		医学に用いる用語を初めて学ぶ講義となる。解剖学用語の意味が理解できず、理療法学の情報の入手は困難となる。そのためには英単語を覚えた時と同様に、解剖学用語の記憶に費やす。時間外学習は必須である。(約2時間)													
教科書	野村編『標準理療法学・作業療法専門基礎分科解剖学 第5版』(医学書院, 2020)、牛木辰男編『入門組織学 改訂第2版』(南江堂, 2013) 河上敬介、岡貝君編『骨格筋の形と触診法改訂第2版』(大修館, 2013)															
参考書	J.W.Rohen, 橋地千訳共著『解剖学カラーアトラス第7版』(医学書院, 2012) V. P. Broschenko 著、相澤貞和(訳)『diFlora人体組織図譜 原著第11版』(南江堂, 2011)															
成績評価の方法及び評価割合	評価方法	割合	目標1	目標2	目標3	目標4	目標5	目標6	目標7	目標8	目標9	目標10				
	実習中に実施する口頭試験	30%	○	○	○											
	実習中に実施する小テスト	30%	○	○	○											
	期末口頭試験	40%	○	○	○											
注意事項	他学部との関係で、定められた曜日・期限以外の開講もあるので、講義1回目に渡す日程表に従って授業計画を立てること。															
備考	スケジュールの詳細に関しては、第1回目に提示する。															
リンク	URL															

ナンバリング		授業科目名(科目の英文名)				区分・【新主題】/(分野)						
H030B113		解剖学Ⅱ (Anatomy Ⅱ)				基礎系						
必修選択	単位	対象年次	学部	学期	履・限	担当教員						
必修	1	1	福祉健康科学部	後期		氏名 紀 瑞成, 河上敬介 E-mail jleolta-u.ac.jp, kkawakanleolta-u.ac.jp. 内線 7973 (紀), 7735 (河上)						
授業の概要 解剖学Ⅰにひきつづき、人体の構造についての知識を深める。具体的には、消化器系、呼吸器系、循環器系、泌尿器系、内分泌器系、感覚器系、中枢神経系、末梢神経系の諸系統に分けて学習する。特に、神経系に関しては、その構造と役割について詳しく学習する。更に、局所解剖学を主体として、四肢、体幹の各部位ごとに主に運動器系、神経系、循環器系の位置関係について理解を深める。これらの講義を通して、臨床で必要とされる人体構造の基礎について理解し、その面白さを学習する。												
具体的な到達目標						DP等の対応(別表参照)	12345678910					
目標1	各系統の定義や役割、および主な器官の位置や構造を説明できる。						○					
目標2	四肢、体幹の各部位ごとに主な運動器系、神経系、循環器系の位置関係について説明できる。						○					
目標3	個々の筋の起始・停止・神経支配・脊髄神経レベル・作用を説明できる。						○					
目標4												
目標5												
目標6												
目標7												
目標8												
目標9												
目標10												
授業の内容												
1 肩甲部1の局所解剖学 (河上)												
2 肩甲部2、上腕部の局所解剖学 (河上)												
3 前腕部の局所解剖学 (河上)												
4 胸郭、体幹前面1の局所解剖学 (河上)												
5 体幹前面2、体幹後面の局所解剖学 (河上)												
6 骨盤、臀部の局所解剖学 (河上)												
7 大腿部の局所解剖学 (河上)												
8 下腿部の局所解剖学 (河上)												
9 内臓学Ⅰ(循環器系・呼吸器系) (紀)												
10 内臓学Ⅱ(消化器系・泌尿器系) (紀)												
11 内臓学Ⅲ(生殖器系・内分泌器系) (紀)												
12 感覚器系概論、皮膚・視覚器・平衡聴覚器 (紀)												
13 神経系統論 神経系の区分・構成、髄膜と脳室系 (紀)												
14 中枢神経系統論: 脊髄・大脳半球の特徴 (紀)												
15 末梢神経系統論、脊髄神経・脳神経・自律神経系の特徴 (紀)												
ラーニング	A:知識の定着・確認 B:意見の表現・交換 C:応用志向 D:知識の活用・創造					工夫	その他の 解剖学Ⅱとその実習は時間を区切らず、実物を見ながら理解を深めることができるように進める。					
時間外学習の内容と時間の目安	準備 予習が必須である。 事後 学習											
教科書	野村肇編『標準理学療法学・作業療法学専門基礎分野解剖学 第5版』(医学書院, 2020)											
参考書	小川 鼎三, 森 於菟『分担解剖学1巻 改訂第11版』(金原出版, 1950) 平沢典『分担解剖学2巻 改訂第11版』(金原出版, 1950) 小川鼎三『分担解剖学3巻 改訂第11版』(金原出版, 1950) Frank H. Netter著, 相磯貞和(訳)『ネッター解剖学アトラス 第5版』(南江堂2011)											
成績評価の方法及び評価割合	評価方法	割合	目標1	目標2	目標3	目標4	目標5	目標6	目標7	目標8	目標9	目標10
	講義中に実施する小テスト	30%	○	○	○							
	期末試験	70%	○	○	○							
	期末試験は60点以上を合格とする。											
注意事項	他学部との関係で、定められた曜日・時限以外の開講もあるので、講義1回目に渡す日程表に従って授業計画を立てること。											
備考	スケジュールの詳細に関する説明は、前期後半に提示する。											
リンク	URL											

ナンバリング		授業科目名(科目の英文名)				区分・【新主観】/(分野)	
H030B114		解剖学II実習(Practice of Anatomy II)				基礎系	
必修選択	単位	対象年次	学部	学期	履・限	担当教員	
必修	2	1	福祉健康科学部	後期		氏名 紀 瑞成, 河上敬介, 川上健二, 菅田陽伶 E-mail jisoita-u.ac.jp, kkawakani@oita-u.ac.jp 内線 7973 (紀), 7735 (河上)	
授業の概要 医学部解剖学教室の協力のもと、実際の骨標本や液浸標本を用いて実施する。具体的には、消化器系、呼吸器系、循環器系、泌尿器系、内分泌器系、感覚器系、中枢神経系、末梢神経系の標本により、各器官系の構造を詳細に観察し、各器官系の役割について考察する。また、胸部と腹部に分けて各器官系同士の位置関係を観察し、その意味について考察する。更に、運動器系に関しては、四肢、体幹の各部位における末梢神経や脈管との三次元的な位置関係を詳細に観察するとともに、生体において触察を行う体験解剖学実習を実施する。							
具体的な到達目標						DP等の対応(別表参照)	1 2 3 4 5 6 7 8 9 10
目標1	各系統間の位置関係を説明できる。						○ ○ ○
目標2	各系統を構成する器官の位置関係や構造を説明できる。						○ ○ ○
目標3	骨・筋・末梢神経・脈管に関しては体表から触察できる。						○ ○ ○
目標4							
目標5							
目標6							
目標7							
目標8							
目標9							
目標10							
授業の内容							
1	肩甲部(1)の構造の観察と触察(河上, 川上, 菅田)						
2	肩甲部(2)、上腕部(1)の構造の観察と触察(河上, 川上, 菅田)						
3	上腕部(2)、前腕部(1)の構造の観察と触察(河上, 川上, 菅田)						
4	前腕部(2)の構造の観察と触察(河上, 川上, 菅田)						
5	胸郭、内臓の構造の観察と触察(河上, 川上, 菅田)						
6	体幹前面の構造の観察と触察(河上, 川上, 菅田)						
7	体幹後面、骨盤の構造の観察と触察(河上, 川上, 菅田)						
8	臀部、大腿部(1)の構造の観察と触察(河上, 川上, 菅田)						
9	大腿部(2)の構造の観察と触察(河上, 川上, 菅田)						
10	下腿部の構造の観察と触察(河上, 川上, 菅田)						
11	まとめ(河上, 川上, 菅田)						
12	胸腔内臓と血管(心臓・肺)の観察(紀)						
13	腹腔内臓と血管(胃・腸・肝臓・脾臓・腎臓)の観察(紀)						
14	骨盤腔内臓と血管(子宮・卵巣・膀胱・直腸、甲状腺・副腎など)の観察(紀)						
15	皮膚・視覚器・平衡感覚器の観察(紀)						
16	中枢神経系一脳1の観察(紀)						
17	中枢神経系一脳2・脊髄1の観察(紀)						
18	神経系一脊髄2・脊髄神経・脳神経・自律神経系の観察(紀)						
19							
20							
21							
22							
23							
24							
25							
26							
27							
28							
29							
30							
ラーニング	A:知識の定着・確認	○	小テスト、口頭試問、グループでの共同作業、グループ発表				工夫その他の
	B:意見の表現・交換	○					
	C:応用志向	○					
	D:知識の活用・創造	○					
時間外学習の内容と時間の目安	準備学習	前半は毎回口頭試問を実施するため復習が必須である(約2時間ほど)。					
教科書	野村肇編『標準理学療法学・作業療法学専門基礎分野解剖学 第4版』(医学書院, 2020) 河上敬介, 磯貝香『骨格筋の形と触察法改訂第2版』(大峰閣, 2013)						
参考書	坂井建雄『プロメテウス解剖学アトラス解剖学総論/運動器系 第2版』(医学書院, 2011) 坂井建雄『プロメテウス解剖学アトラス 頭頸部/神経解剖 第2版』(医学書院, 2014) 坂井建雄『プロメテウス解剖学アトラス 胸部/腹部・骨盤部 第2版』(医学書院, 2014) 坂井建雄『プロメテウス解剖学アトラス 口腔・頭頸部』(医学書院, 2012) Frank H. Netter著, 相模貞和(訳)『ネッター解剖学アトラス 第5版』(南江堂2011)						

成績評価の方法及び評価割合	評価方法	割合	目標	目標	目標	目標	目標	目標	目標	目標	目標	目標
			1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
	実習中に実施する口頭試問	40%	○	○	○							
	期末口頭試問	60%	○	○	○							
	期末試験は60点以上を合格とする。											
注意事項	他学部との関係で、定められた曜日・時間以外の開講もあるので、講義1回目に渡す日程表に従って授業計画を立てること。											
備考	スケジュールの詳細に関する説明は、前期後半の実習時に提示する。											
リンク	URL											

ナンバリング		授業科目名(科目の英文名)				区分・【新主題】/ (分野)	
H030B104		生理学(Physiology)				基礎系	
必修選択	単位	対象年次	学部	学期	履・限	担当教員	
必修	2	1	福祉健康科学 部理学療法コ ース	通年		氏名 徳丸治 E-mail: ostokuma 内線 7972	
授業の概要	疾病を理解してそのリハビリテーションを図るためには、人体の正常機能を理解することが不可欠である。生体の正常機能についての科学である生理学を学ぶことは、理学療法の基礎として重要である。						
具体的な到達目標						DP等の対応(別表参照)	1 2 3 4 5 6 7 8 9 10
目標1 ホメオスタシスの過程を説明することができる。							○
目標2 生命を維持する生体の機能である植物機能について説明することができる。							○
目標3 外部環境に対する生体の適応の過程である動物機能について説明することができる。							○
目標4							
目標5							
目標6							
目標7							
目標8							
目標9							
目標10							
授業の内容							
1 生理学入門：動物機能と植物機能、ホメオスタシス							
2 呼吸機能-1：換気機能、ガス交換							
3 呼吸機能-2：換気血流比、呼吸機能の調節							
4 循環機能-1：心筋の興奮とその伝導、心臓のポンプ機能							
5 循環機能-2：血圧の調節、微小循環							
6 消化機能-1：消化管運動、消化管吸収							
7 消化機能-2：消化液の分泌、消化管ホルモン							
8 体液：細胞内液と細胞外液、アシドーシスとアルカローシス							
9 腎機能：尿の生成と体液の調節、排泄機能							
10 血液：赤血球、白血球、血小板、血漿の成分、凝固							
11 内分泌-1：内分泌総論							
12 内分泌-2：内分泌各論							
13 自律神経：交感神経と副交感神経							
14 生殖：生殖機能の特徴、男性生殖機能、女性生殖機能							
15 生殖：性の分化と発達							
16 静止膜電位：平衡電位、濃度勾配と電位勾配、ナトリウムポンプ							
17 活動電位：電位依存性Na ⁺ チャネル、電位依存性K ⁺ チャネル、不応期							
18 興奮の伝導：伝導の機序、有髄線維と無髄線維							
19 情報の伝達：シナプス、神経伝達物質							
20 シナプスの可塑性と神経再生：長期増強、長期抑圧、神経再支配							
21 骨格筋：滑走説、興奮収縮連関、骨格筋のエネルギー代謝							
22 自律神経系：交感神経、副交感神経							
23 感覚機能-1：感覚総論、体性感覚（皮膚感覚、深部感覚）							
24 感覚機能-2：視覚、聴覚、前庭覚							
25 感覚機能-3：味覚、嗅覚							
26 運動機能-1：運動単位、脊髄反射							
27 運動機能-2：脳幹反射、小脳							
28 運動機能-3：大脳基底核、大脳皮質運動野							
29 高次脳機能-1：連合野、覚醒と睡眠、脳波							
30 高次脳機能-2：学習と記憶、情動							
ラーニング アクティ ビティ マップ	A:知識の定着・確認 ○ 講義の冒頭に、前回の講義内容に関する発表を課す。 B:意見の表現・交換 ○ C:応用志向 ○ D:知識の活用・創造 ○				工夫 その 他の		
時間外学習 の内容と時 間の目安	準備 参考図書等で次回講義内容の予習を行うこと(60h)。 事後 配付資料や参考図書等で講義内容の復習を行うこと(60h)。						
教科書	特に指定しない。下記参考書等の中から自分にあったものを用意すること。						
参考書	・ 生理学テキスト第8版(文光堂, 2017) 大地陸男 著 (600頁) ・ 標準生理学 第9版(医学書院, 2019) 本郷利憲, 廣重力, 豊田順一, 熊田衛 編集 (1202頁) ・ ギャノン生理学 原書第25版(丸善, 2017) W.F. Ganong著, 岡田榮伸監修 (898頁)						

成績評価の方法及び評価割合	評価方法	割合	目標1	目標2	目標3	目標4	目標5	目標6	目標7	目標8	目標9	目標10
	定期試験	50%	○	○	○							
	課題レポート	50%	○	○	○							
注意事項	高等学校において数学III、物理、化学、生物を履修していることを前提として講義を行う。											
備考	上記の参考書は担当教員の居室（福祉健康科学部研究棟2階）で実物を見ることができる。											
リンク												
	URL											
担当教員の 実務経験の 有無	○											
教員の 実務 経験	医師（小児科専門医、宇宙航空医学認定医、日本医師会認定産業医）、自衛官（元・航空自衛隊航空医官、予備自衛官）、元・宇宙開発事業団団長、産業医											
実務経験を いかした教 育内容	臨床や健康管理業務での経験に基いた教育を心掛けたい。											

ナンバリング		授業科目名(科目の英文名)					区分・【新主題】/(分野)										
H030B103		生理学実習(Practicum in physiology)					基礎系										
必修選択	単位	対象年次	学部	学期	曜・限	担当教員											
必修	2	1	福祉健康科学部 理学療法コース	後期		氏名 徳丸治 E-mail ostokuma 内線 7972											
授業の概要	生体の正常機能についての科学である生理学を学ぶことは、理学療法士の基礎として重要である。生理学の講義において学習した人体の機能を、刺激に対する生体の反応を実際に観察することにより、真の理解を目指す。																
具体的な到達目標						DP等の対応(別表参照)		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
目標1	実習書に基いて正確に実験を行うことができる。							○									
目標2	観察した結果を正確に記述し、分かり易く提示することができる。							○									
目標3	結果に基いて論理的に考察することができる。								○								
目標4																	
目標5																	
目標6																	
目標7																	
目標8																	
目標9																	
目標10																	
授業の内容																	
1 オリエンテーション																	
2 カエル坐骨神経の活動電位(1)																	
3 カエル坐骨神経の活動電位(2)																	
4 ヒト神経の伝導速度(1)																	
5 ヒト神経の伝導速度(2)																	
6 味覚																	
7 皮膚感覚																	
8 視覚(視野)																	
9 聴覚(音源定位)																	
10 眼球運動																	
11 脳波																	
12 誘発電位と事象関連電位																	
13 実習成果発表会準備(ポスター作成)																	
14 実習成果発表会準備(ポスター中間チェック)																	
15 実習成果発表会(ポスターによるプレゼンテーション)																	
ラーニング	A:知識の定着・確認		○		生理学実習のレポートを課す。実習で得られたデータに基づいた学習グループ内での議論を通じて、人体の機能に対する理解を深めることを期待する。自然科学のレポートとして、一定水準に達するまで繰り返し指導を行うので、積極的な取り組みを期待する。										工夫 その他		
時間外学習の内容と時間の目安	準備	実習書を熟読し、どのような実習を行うか十分に理解しておくこと(30h)。															
	事後	実習で得たデータを整理し、必要な解析を行い、実習班毎にレポートにまとめる(60h)。															
教科書	特に指定しない。下記参考書等の中から自分にあったものを用意すること。																
参考書	日本生理学会教育委員会監修、新訂生理学実習書、南江堂(東京、2013)																
成績評価の方法及び評価割合	評価方法	割合	目標1	目標2	目標3	目標4	目標5	目標6	目標7	目標8	目標9	目標10					
	レポート	50%	○	○	○												
	実習成果発表会	50%		○	○												
注意事項																	
備考	上記の参考書は担当教員の居室(福祉健康科学部研究棟2階)で実物を見ることができます。																
リンク	URL																

担当教員の 実務経験の 有無	○
教員の実務 経験	医師（小児科専門医，宇宙航空医学認定医，日本医師会認定産業医），自衛官（元・航空自衛隊航空医官，予備自衛官），元・宇宙開発事業団医長，産業医
実務経験を いかした教 育内容	臨床や健康管理業務での経験に基づいた教育を心掛けたい。

ナンバリング		授業科目名(科目の英文名)					区分・【新主題】/(分野)									
H030B105		生化学(Biochemistry)					基礎系									
必修選択	単位	対象年次	学部	学期	曜・限	担当教員										
必修	1	1	福祉健康科学部	前期		氏名 安部真佐子・岩崎香子(福・非)										
						E-mail 内線										
授業の概要																
生活を包括的に支援するためには、生命現象の基礎を生体分子から理解する必要がある。さらに生体分子の代謝を理解し、健康状態や病態において人体で起こっていることを想像できる力をつける。実践を展開する際に的確な用語で他職種とディスカッションでき、対象者に説明できるような応用力のある生化学的知識を獲得することを目指す。																
具体的な到達目標																
DF等の対応(別表参照)																
目標1	生体分子の種類と役割を説明できる。															
目標2	生体内の代謝に関連付け、統合された人体の中でイメージできる															
目標3	恒常性維持のメカニズムを説明できる															
目標4	病態の生化学を他の科目の学習に応用できる															
目標5																
目標6																
目標7																
目標8																
目標9																
目標10																
授業の内容																
1 人体を構成する化学物質と細胞																
2 食物成分の生体への取り込みと利用																
3 安静・運動時の生体エネルギーの産出と利用																
4 生体と食物に含まれる糖質の細胞と血糖維持																
5 脂質の細胞レベルと個体レベルでの役割																
6 窒素源としてのタンパク質																
7 遺伝情報を伝えるための核酸の代謝と栄養の関わり																
8 生体内での酵素の役割と異常																
9 細胞間・細胞内の情報伝達																
10 ホルモン・生理活性物質と作用(1) (視床下部、下垂体、甲状腺、副甲状腺)																
11 ホルモン・生理活性物質と作用(2) (膵、副腎、性腺、消化管ホルモン)																
12 内分泌系異常と疾病、体液調節																
13 ビタミンの役割と異常																
14 ミネラルの役割と異常																
15 生体防御の基本的仕組み																
ラーニング目標	A:知識の定着・確認 B:意見の表現・交換 C:応用志向 D:知識の活用・創造	☐ 復習のための小テストを講義中に行う。 ミニッツペーパーで知識定着の程度を確認する。	工夫その他の													
時間外学習の内容と時間の目安	準備 授業前に教科書の該当箇所を必ず読んでおいてください(1h×15回)。 事後 教科書や配布資料を用いて、授業で学習した内容を復習してください(2h×15回)。															
教科書	奥恒行、山田和彦編集 「基礎から学ぶ生化学」 改訂第3版(南江堂)、2019年。															
参考書	D.Papachristodoulou, 他, 「エリオット生化学・分子生物学」(東京化学同人)、2016年 石崎泰樹、丸山 敬(監修、翻訳)「イラストレイテッド 生化学」(リッピンコットシリーズ) 原著7版(丸善出版)、2019年 清水孝雄(監修、翻訳)「イラストレイテッド ハーパー生化学」原著30版(丸善出版)、2016年															
成績評価の方法及び評価割合	評価方法	割合	目標1	目標2	目標3	目標4	目標5	目標6	目標7	目標8	目標9	目標10				
	講義中に実施する小テスト	20%	○	○	○	○										
	期末試験	80%	○	○	○	○										
講義中に実施する小テストと期末試験の合格を単位取得の条件とする。																
注意事項	生化学は生理学の内容と深く関連しているので、生理学の内容をリンクさせることを念頭に置いて講義に臨んでください。															
備考	なし															
リンク	URL															

担当教員の 実務経験の 有無	○
教員の実務 経験	安部眞佐子（管理栄養士）
教員以外の 指導に関わ る実務経験 者	大学の保健センターで栄養指導
実務経験を いかした教 育内容	リハビリテーションで必要とされる人体の栄養について考慮しながら、生化学の知識を習得する。

ナンバリング		授業科目名(科目の英文名)					区分・【新主題】/(分野)																																																																																																																																		
H0208121		病理学(Pathology)					基礎系																																																																																																																																		
必修選択	単位	対象年次	学部	学期	曜・限	担当教員																																																																																																																																			
理学療法コース：必修、その他のコース：選択	1	1	福祉健康科学部	後期		氏名 守山・正風																																																																																																																																			
						E-mail 内線																																																																																																																																			
授業の概要 医療の現場で患者と関わるためには、個々の患者の病状についての深い理解が必須である。病理学とは病気の成り立ちを明らかにする学問であり、従って本授業では疾患の病気の成り立ち（病因）と病態を正しく理解することを目的とする。そして医療現場における病理学の果たす役割を理解することを目的とする。																																																																																																																																									
具体的な到達目標 DP等の対応(別表参照) <table border="1"> <thead> <tr> <th></th> <th>1</th> <th>2</th> <th>3</th> <th>4</th> <th>5</th> <th>6</th> <th>7</th> <th>8</th> <th>9</th> <th>10</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>目標1 病理学総論で扱う細胞傷害、炎症、免疫、循環障害、感染症、先天異常、腫瘍、生活習慣病、難病の病因・病態を説明できる。</td> <td>○</td> <td>○</td> <td>○</td> <td>○</td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> </tr> <tr> <td>目標2 病理学各論で扱う各臓器の疾患の病因・病態を説明できる。</td> <td>○</td> <td>○</td> <td>○</td> <td>○</td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> </tr> <tr> <td>目標3 医療現場における病理診断学の役割を理解し、各疾患の組織学的特徴を説明できる。</td> <td>○</td> <td>○</td> <td>○</td> <td>○</td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> </tr> <tr> <td>目標4</td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> </tr> <tr> <td>目標5</td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> </tr> <tr> <td>目標6</td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> </tr> <tr> <td>目標7</td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> </tr> <tr> <td>目標8</td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> </tr> <tr> <td>目標9</td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> </tr> <tr> <td>目標10</td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> </tr> </tbody> </table>																		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	目標1 病理学総論で扱う細胞傷害、炎症、免疫、循環障害、感染症、先天異常、腫瘍、生活習慣病、難病の病因・病態を説明できる。	○	○	○	○							目標2 病理学各論で扱う各臓器の疾患の病因・病態を説明できる。	○	○	○	○							目標3 医療現場における病理診断学の役割を理解し、各疾患の組織学的特徴を説明できる。	○	○	○	○							目標4											目標5											目標6											目標7											目標8											目標9											目標10										
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10																																																																																																																															
目標1 病理学総論で扱う細胞傷害、炎症、免疫、循環障害、感染症、先天異常、腫瘍、生活習慣病、難病の病因・病態を説明できる。	○	○	○	○																																																																																																																																					
目標2 病理学各論で扱う各臓器の疾患の病因・病態を説明できる。	○	○	○	○																																																																																																																																					
目標3 医療現場における病理診断学の役割を理解し、各疾患の組織学的特徴を説明できる。	○	○	○	○																																																																																																																																					
目標4																																																																																																																																									
目標5																																																																																																																																									
目標6																																																																																																																																									
目標7																																																																																																																																									
目標8																																																																																																																																									
目標9																																																																																																																																									
目標10																																																																																																																																									
授業の内容 <table border="1"> <tbody> <tr><td>1</td><td>病理学とはなにか</td></tr> <tr><td>2</td><td>細胞傷害</td></tr> <tr><td>3</td><td>炎症</td></tr> <tr><td>4</td><td>免疫</td></tr> <tr><td>5</td><td>循環障害</td></tr> <tr><td>6</td><td>先天異常・遺伝性疾患</td></tr> <tr><td>7</td><td>感染症</td></tr> <tr><td>8</td><td>環境因子・栄養</td></tr> <tr><td>9</td><td>腫瘍</td></tr> <tr><td>10</td><td>生活習慣病</td></tr> <tr><td>11</td><td>難病</td></tr> <tr><td>12</td><td>ケーススタディによる疾病理解</td></tr> <tr><td>13</td><td>ケーススタディによる疾病理解</td></tr> <tr><td>14</td><td>ケーススタディによる疾病理解</td></tr> <tr><td>15</td><td>ケーススタディによる疾病理解</td></tr> </tbody> </table>																	1	病理学とはなにか	2	細胞傷害	3	炎症	4	免疫	5	循環障害	6	先天異常・遺伝性疾患	7	感染症	8	環境因子・栄養	9	腫瘍	10	生活習慣病	11	難病	12	ケーススタディによる疾病理解	13	ケーススタディによる疾病理解	14	ケーススタディによる疾病理解	15	ケーススタディによる疾病理解																																																																																											
1	病理学とはなにか																																																																																																																																								
2	細胞傷害																																																																																																																																								
3	炎症																																																																																																																																								
4	免疫																																																																																																																																								
5	循環障害																																																																																																																																								
6	先天異常・遺伝性疾患																																																																																																																																								
7	感染症																																																																																																																																								
8	環境因子・栄養																																																																																																																																								
9	腫瘍																																																																																																																																								
10	生活習慣病																																																																																																																																								
11	難病																																																																																																																																								
12	ケーススタディによる疾病理解																																																																																																																																								
13	ケーススタディによる疾病理解																																																																																																																																								
14	ケーススタディによる疾病理解																																																																																																																																								
15	ケーススタディによる疾病理解																																																																																																																																								
ラ	1	A:知識の定着・確認	スライドや実際の症例をもとに問題解決型学習を指導する。教科書に記述されている365症例のケーススタディを通して、疾病理解を深めるとともに、臨床医学に進む基礎を学ぶ。	工夫	その他の	予習、復習を慣例化させることにより学力向上を図る。																																																																																																																																			
ク	2	B:意見の表現・交換																																																																																																																																							
ニ	3	C:応用志向																																																																																																																																							
テ	4	D:知識の活用・創造																																																																																																																																							
グ	5	準備	ケーススタディでは、必ず事前に予習をしていくこと（15h）																																																																																																																																						
時間外学習	6	事後	講義後の復習を必ず行うこと（30h）																																																																																																																																						
の内容と時間	7	学修																																																																																																																																							
の目安	8																																																																																																																																								
教科書	ダイナミック病理学（西村書店）																																																																																																																																								
参考書	ロビンス 基礎病理学（廣川書店）																																																																																																																																								
成績評価の方法及び評価割合	評価方法	割合	目標1	目標2	目標3	目標4	目標5	目標6	目標7	目標8	目標9	目標10																																																																																																																													
	筆記試験	100%	○	○	○																																																																																																																																				
注意事項	なし																																																																																																																																								
備考	学生がより深く学ぶための工夫として一方的な講義ではなく、学生とdiscussionしながら学生の理解を導くような授業のやり方をしています。ケーススタディにより疾病理解を深め、疾病診断能力を高める																																																																																																																																								
リンク	URL																																																																																																																																								

担当教員の 実務経験の有無	○
教員の実務 経験	医師

ナンバリング		授業科目名(科目の英文名)					区分・【新主題】 / (分野)					
H020b122		人間発達学(Human Development)					基礎系					
必修選択	単位	対象年次	学部	学期	履・限	担当教員						
必修	1	1	福祉健康科学 部理学療法コ ース	後期		氏名 紀 瑞成, 徳丸 治 E-mail ji@oita-u.ac.jp, ostokuna@oita-u.ac.jp 内線 7973 (紀), 7972 (徳丸)						
授業の概要 福祉健康科学部の学生は、将来、さまざまな年齢の人々を対象とした地域包括ケアを担うことが期待されている。この授業は、受精から出生、小児を経て成人し、やがて加齢から死に至る過程を理解することを目的とする。												
具体的な到達目標							DP等の対応(別表参照)	1 2 3 4 5 6 7 8 9 10				
目標1 受精から出生までの成長と発達について説明できる。								○				
目標2 出生から思春期に至るまでの小児の成長と発達について説明できる。								○				
目標3 加齢に伴う人体機能の変化について説明できる。								○				
目標4												
目標5												
目標6												
目標7												
目標8												
目標9												
目標10												
授業の内容												
1 生殖形成 (紀)												
2 排卵、着床 (紀)												
3 二層性胚盤、三層性胚盤 (紀)												
4 胚子期 (紀)												
5 胎児期、胎膜・胎盤 (紀)												
6 胎児の血液循環 (紀)												
7 中枢神経発生の概略とまとめ (紀)												
8 新生児期 (徳丸)												
9 乳児期 (徳丸)												
10 幼児期 (徳丸)												
11 学童期 (徳丸)												
12 思春期 (徳丸)												
13 青年期・老年期 (徳丸)												
14 受精形成 (徳丸)												
15 まとめ (徳丸)												
ラーニング	A:知識の定着・確認 B:意見の表現・交換 C:応用志向 D:知識の活用・創造	○ 教員が一方的に話すだけにならないよう、学生とのdiscussionを楽しみながら講義を行いたい。 ○ ○ ○					工夫 その他					
時間外学習の内容と時間の目安	準備 学修	下記参考図書等を読んで、講義内容について予習しておくこと (30h)。										
	事後 学修	配布資料や参考図書などによりしっかりと復習を行うこと (30h)。										
教科書	指定しない											
参考書	T.W.Sadler著、安田孝生(訳) 『ラングマン人体発生学』 (メディカルサイエンスインターナショナル, 2010) 内山聖 著 『標準小児科学』 第8版 (医学書院, 2013)											
成績評価の方法及び評価割合	評価方法	割合	目標1	目標2	目標3	目標4	目標5	目標6	目標7	目標8	目標9	目標10
	期末試験	100%	○	○	○							
注意事項	なし											
備考	なし											
リンク	URL											

担当教員の 実務経験の 有無	○
教員の実務 経験	医師（小児科専門医）
実務経験を いかした教 育内容	臨床や健康管理業務での経験に基づいた教育を心掛けたい。

ナンバリング		授業科目名(科目の英文名)				区分・【新主題】/(分野)											
H030B214		運動学Ⅰ(KinesiologyⅠ)				基礎系											
必修選択	単位	対象年次	学部	学期	履・限	担当教員											
必修	1	1	福祉健康科学部	後期		氏名 阿南雅也 E-mail anan-masaya@olta-u.ac.jp 内線 6115											
授業の概要 運動学は、人間の身体運動を科学的に分析する学問であり、リハビリテーションの領域の基礎的知識として重要な学問である。本講義では、人間の運動を構成する基礎的な力学、関節や筋の構造と機能などを学ぶ。																	
具体的な到達目標						DP等の対応(別表参照)	1 2 3 4 5 6 7 8 9 10										
目標1 身体運動の解釈に必要な力学の基礎的知識を説明できる						○											
目標2 生体の構造と機能を説明できる						○											
目標3 上肢帯と上肢の運動、下肢帯と下肢の運動、頭部・体幹の運動を説明できる						○											
目標4																	
目標5																	
目標6																	
目標7																	
目標8																	
目標9																	
目標10																	
授業の内容																	
1 運動学と理学療法																	
2 生体力学の基礎 part 1																	
3 生体力学の基礎 part 2																	
4 生体力学の基礎 part 3																	
5 生体力学の基礎 part 4																	
6 生体の構造と機能 part 1																	
7 生体の構造と機能 part 2																	
8 生体の構造と機能 part 3																	
9 上肢帯と上肢の運動 part 1																	
10 上肢帯と上肢の運動 part 2																	
11 下肢帯と下肢の運動 part 1																	
12 下肢帯と下肢の運動 part 2																	
13 頭部・体幹の運動 part 1																	
14 頭部・体幹の運動 part 2																	
15 頭部・体幹の運動 part 3																	
ラーニング 目標	A:知識の定着・確認		○授業開始時に前回の小テストを行う。			工夫 その他の	動画の活用、LMS (Moodle) を積極的に導入し、予習・復習をしやすい環境を整備										
	B:意見の表現・交換		○講義の中でグループディスカッションを適宜行う。														
	C:応用志向		実際の臨床での事例などを交える。														
	D:知識の活用・創造																
時間外学習 の内容と時間 の目安	準備 学習	教科書と事前にMoodleにアップした講義資料を用いて予習する(30h)。															
	事後 学習	教科書とMoodleにアップした講義資料や動画を用いて復習する(30h)。															
教科書		中村隆一・他：基礎運動学 第6版補訂、医歯薬出版、2012															
参考書		藤縄理・他：運動学テキスト 改訂第2版(細田多穂 監修)、南江堂、2015 Neumann DA：筋骨格系のキネシオロジー 原著第3版(Andrew PD・他 監訳)、医歯薬出版、2018															
成績 評価 の 方 法 及 び 評 価 割 合	評価方法					割合	目標1	目標2	目標3	目標4	目標5	目標6	目標7	目標8	目標9	目標10	
	学期末試験					70%	○	○	○								
	小テスト					30%	○	○	○								
各定期試験はそれまでの出席回数が2/3以上の者にも受験資格を有す。																	
注意事項		やむを得ない理由による授業欠席、定期試験受験欠席のときは、必ず連絡のうえ必要な書類を提出する。															
備考		なし															
リンク		Moodle (2021後期-次1 運動学Ⅰ) を参照すること															
		URL															

担当教員の 実務経験の 有無	○
教員の実務 経験	理学療法士
実務経験を いかした教 育内容	理学療法士としての実務経験をもつ教員が、臨床・研究・教育経験を生かして、理学療法士として基礎的知識として重要な運動学の教育を行っている。

ナンバリング		授業科目名(科目の英文名)				区分・【新主題】/(分野)						
H0308215		運動学II (Kinesiology-II)				基礎系						
必修選択	単位	対象年次	学部	学期	履・限	担当教員						
必修	1	2	福祉健康科学部	前期		氏名 阿南雅也 E-mail anan-masaya@oita-u.ac.jp 内線 6115						
授業の概要 運動学Iで学んだ身体運動の基本的な力学や関節や筋骨格系の構造・機能連関を基に、これらの学習を基盤とした姿勢や歩行などのメカニズムや、運動制御に関する神経学的、生理学的な基礎知識についても学習する。												
具体的な到達目標						DP等の対応(別表参照)						
目標1	姿勢や歩行などのメカニズムを説明できる					1	2					
目標2	寝返りや立ち上がり動作などのメカニズムを説明できる					3	4					
目標3	運動と動作の分析方法を説明できる					5	6					
目標4	運動制御に関する神経学的、生理学的な基礎知識を説明できる					7	8					
目標5						9	10					
目標6												
目標7												
目標8												
目標9												
目標10												
授業の内容												
1	姿勢 part 1											
2	姿勢 part 2											
3	歩行と走行 part 1											
4	歩行と走行 part 2											
5	歩行と走行 part 3											
6	寝返り・起き上がり・立ち上がり、歩行関連動作 part 1											
7	寝返り・起き上がり・立ち上がり、歩行関連動作 part 2											
8	運動と動作の分析 part 1 (三次元動作解析)											
9	運動と動作の分析 part 2 (床反力)											
10	運動と動作の分析 part 3 (筋電図)											
11	運動制御系・運動学習 part 1											
12	運動制御系・運動学習 part 2											
13	運動制御系・運動学習 part 3											
14	運動制御系・運動学習 part 4											
15	運動制御系・運動学習 part 5											
ラーニング目標	A:知識の定着・確認 B:意見の表現・交換 C:応用志向 D:知識の活用・創造	☐ 授業開始時に前回分の小テストを行う。 ☐ 講義の中でグループディスカッションを適宜行う。 実際の臨床での事例などを交える。	工夫 その他	動画の活用、LMS (Moodle) を積極的に導入し、予習・復習をしやすい環境を整備								
時間外学習の内容と時間の目安	準備 教科書と事前にMoodleにアップした講義資料を用いて予習する(30h)。 事後 教科書とMoodleにアップした講義資料や動画をj用いて復習する(30h)。											
教科書	中村隆一・他:基礎運動学 第6版補訂、医歯薬出版、2012											
参考書	藤縄理・他:運動学テキスト 改訂第2版(細田多穂 監修)、南江堂、2015 Neumann DA:筋骨格系のキネシオロジー 原著第3版(Andrew PD・他 監訳)、医歯薬出版、2018											
成績評価の方法及び評価割合	評価方法	割合	目標1	目標2	目標3	目標4	目標5	目標6	目標7	目標8	目標9	目標10
	学期末試験	70%	○	○	○	○						
	小テスト	30%	○	○	○	○						
	各定期試験はそれまでの出席回数が2/3以上の者によりのみ受験資格を有す。											
注意事項	やむを得ない理由による授業欠席、定期試験受験欠席のときは、必ず連絡のうえ必要な書類を提出する。											
備考	なし											
リンク	Moodle (2021前期-木2 運動学II) を参照すること											
	URL											

担当教員の 実務経験の 有無	○
教員の実務 経験	理学療法士
実務経験を いかした教 育内容	理学療法士としての実務経験をもつ教員が、臨床・研究・教育経験を生かして、理学療法士として基礎的知識として重要な運動学の教育を行っている。

ナンバリング		授業科目名(科目の英文名)					区分・【新主題】/(分野)										
H030B216		運動学実習(Practice of Kinesiology)					基礎系										
必修選択	単位	対象年次	学部	学期	履・限	担当教員											
必須	1	2	福祉健康科学部	後期		氏名 阿南雅也 E-mail anan-masaya@ita-u.ac.jp 内線 6115											
授業の概要 運動学Ⅰおよび運動学Ⅱで学んだ内容について、実習を通じて理解を深める。実習は三次元動作解析システム、床反力、筋電計などを用いて、身体重心、関節角度などの運動学的データ、圧中心および関節モーメントなどの運動力学データ、筋電図データの計測と解析まで幅広く行う。グループにて課題動作を設定して、各動作の成り立ちを学習する。																	
具体的な到達目標																	
DP等の対応(別表参照)																	
目標1	運動と動作の分析方法を説明できる																
目標2	運動と動作の分析機器を実施できる																
目標3	各動作の成り立ちを計測したデータから説明できる																
目標4																	
目標5																	
目標6																	
目標7																	
目標8																	
目標9																	
目標10																	
授業の内容																	
1 オリエンテーション																	
2 解析動作課題の決定と計画立案 part 1																	
3 解析動作課題の決定と計画立案 part 2																	
4 動作解析実習(動作解析・筋電図)																	
5 動作解析実習(動作解析・筋電図)																	
6 動作解析実習(動作解析・筋電図)																	
7 動作解析実習(動作解析・筋電図)																	
8 プレゼンテーション																	
9																	
10																	
11																	
12																	
13																	
14																	
15																	
ラーニング	A:知識の定着・確認 B:意見の表現・交換 C:応用志向 D:知識の活用・創造	○各種動作の実験を行う。 ○そのデータを元に発表を行う。					工夫	その他の									
時間外学習の内容と時間の目安	準備 学修	運動学Ⅰ・Ⅱの復習を行う(30h)。															
	事後 学修	実験データのまとめ、発表の準備を行う(30h)。															
教科書	中村隆一・他:基礎運動学 第6版補訂, 医歯薬出版, 2012																
参考書	Oatis CA:オーチスのキネシオロジー―身体運動の力学と病態力学 原著第2版(山崎敦・他 監訳)。ラウンドフォラット, 2012。 Neumann DA:筋骨格系のキネシオロジー 原著第2版(嶋田智明・他 監訳)。医歯薬出版, 2012。 Kapandji AI:カパンジー機能解剖学 全3巻 原著第6版(堀田悦仁 監訳)。医歯薬出版, 2010																
成績評価の方法及び評価割合	評価方法	割合	目標1	目標2	目標3	目標4	目標5	目標6	目標7	目標8	目標9	目標10					
	グループ活動への参加状況	30%	○	○	○												
	口頭による実習結果発表	25%	○	○	○												
	発表会への参加状況	20%	○	○	○												
	レポート	25%	○	○	○												
注意事項																	
実験実習終了後にその成果を発表する。グループ単位での実習のため、特別な理由なしに休まないこと。																	
備考																	
なし																	
リンク																	
Moodle (2021後期-金12 運動学実習) を参照すること																	
URL																	

担当教員の 実務経験の 有無	○
教員の実務 経験	理学療法士
実務経験を いかした 育内容	理学療法士としての実務経験をもつ教員が、臨床・研究・教育経験を生かして、理学療法士として基礎的知識として重要な運動学の教育を行っている。

ナンバリング		授業科目名(科目の英文名)					区分・【新主題】/(分野)																																																																																																																										
H0305221		薬理学(Pharmacology)					基礎系																																																																																																																										
必修選択	単位	対象年次	学部	学期	曜・限	担当教員																																																																																																																											
必修	1	2	福祉健康科学部	前学期 (6月3日開講)		氏名 徳丸治, 片岡鼎志, 児玉雅明, 石崎敏理(医学部) E-mail ostokuma 内線 7972																																																																																																																											
授業概要 理学療法士としてリハビリテーションの現場に臨めば、薬物療法を行っていない患者のリハビリテーションに従事することはまれであろう。外来性化学物質の薬物と生体との相互作用を明らかにして治療に役立てようとする学問である薬理学の概要を理解することは、患者の治療に従事する一員である理学療法士として不可欠であるといえる。本講義の前半では、さまざまな薬物の薬理作用と動態の基本を理解することを目標とする。後半では、内科系と外科系の臨床で用いられる代表的な薬剤について取り上げ、薬物療法を受けている患者の理学療法の実務と注意点を取り上げる。																																																																																																																																	
具体的な到達目標 <table border="1"> <thead> <tr> <th>目標</th> <th>1</th> <th>2</th> <th>3</th> <th>4</th> <th>5</th> <th>6</th> <th>7</th> <th>8</th> <th>9</th> <th>10</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>目標1 薬力学の基本的事項を説明できる</td> <td>○</td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> </tr> <tr> <td>目標2 薬物動態の基本的事項を説明できる</td> <td>○</td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> </tr> <tr> <td>目標3 アゴニスト、アンタゴニストについて説明できる</td> <td>○</td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> </tr> <tr> <td>目標4 薬物用量作用曲線を説明できる</td> <td>○</td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> </tr> <tr> <td>目標5 自律神経系の体での役割とその作用薬の機序を説明できる</td> <td></td> <td>○</td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> </tr> <tr> <td>目標6 主な中枢神経系作用薬について説明できる</td> <td></td> <td></td> <td>○</td> <td></td> <td>○</td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> </tr> <tr> <td>目標7 妊婦や小児などに対する薬理作用について説明できる</td> <td></td> <td></td> <td></td> <td>○</td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> </tr> <tr> <td>目標8 治験の概要について説明できる</td> <td></td> <td></td> <td></td> <td>○</td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> </tr> <tr> <td>目標9 内科系で用いる主な薬剤について説明できる</td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td>○</td> <td>○</td> <td>○</td> <td></td> <td></td> <td></td> </tr> <tr> <td>目標10 外科系で用いる主な薬物について説明できる</td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td>○</td> <td></td> <td></td> <td>○</td> <td>○</td> <td></td> </tr> </tbody> </table>									目標	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	目標1 薬力学の基本的事項を説明できる	○										目標2 薬物動態の基本的事項を説明できる	○										目標3 アゴニスト、アンタゴニストについて説明できる	○										目標4 薬物用量作用曲線を説明できる	○										目標5 自律神経系の体での役割とその作用薬の機序を説明できる		○									目標6 主な中枢神経系作用薬について説明できる			○		○						目標7 妊婦や小児などに対する薬理作用について説明できる				○							目標8 治験の概要について説明できる				○							目標9 内科系で用いる主な薬剤について説明できる					○	○	○				目標10 外科系で用いる主な薬物について説明できる					○			○	○	
目標	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10																																																																																																																							
目標1 薬力学の基本的事項を説明できる	○																																																																																																																																
目標2 薬物動態の基本的事項を説明できる	○																																																																																																																																
目標3 アゴニスト、アンタゴニストについて説明できる	○																																																																																																																																
目標4 薬物用量作用曲線を説明できる	○																																																																																																																																
目標5 自律神経系の体での役割とその作用薬の機序を説明できる		○																																																																																																																															
目標6 主な中枢神経系作用薬について説明できる			○		○																																																																																																																												
目標7 妊婦や小児などに対する薬理作用について説明できる				○																																																																																																																													
目標8 治験の概要について説明できる				○																																																																																																																													
目標9 内科系で用いる主な薬剤について説明できる					○	○	○																																																																																																																										
目標10 外科系で用いる主な薬物について説明できる					○			○	○																																																																																																																								
授業の内容 - 薬理学総論：薬理学の歴史、薬力学、薬物動態学（医学部・石崎） - 自律神経とその作用薬（医学部・石崎） - 治験、妊婦と薬剤、小児と薬剤、その他（徳丸） - 中枢神経作用薬、抗精神病薬（徳丸） - 内科系で用いられる薬剤1：消化器、循環器、呼吸器、内分泌、血液（児玉） - 内科系で用いられる薬剤2：抗感染症薬（児玉） - 外科系で用いられる薬剤1：鎮痛薬、麻酔薬（片岡） - 外科系で用いられる薬剤2：抗炎症薬、抗腫瘍薬（片岡）																																																																																																																																	
グループワーク	A:知識の定着・確認 ○講義内で、学生同士のグループディスカッションの時間を設け、知識の定着を図る。 B:意見の表現・交換 C:応用応向 D:知識の活用・創造					工夫その他の 講師の経験した症例とそれに対する処方提示し、実臨床に即した講義を展開する。 薬理学研究の最前線を紹介し、学生のリサーチマインドを醸成する。																																																																																																																											
時間外学習の内容と時間の目安	準備学習 1回あたり2時間（合計14時間） 事後学習 1回あたり2時間（合計14時間）																																																																																																																																
教科書	シンブル薬理学改訂第6版（南江堂、2020）2,900円＋税																																																																																																																																
参考書	標準薬理学第7版（医学書院、2015）6,500円＋税 カッティング薬理学 原書10版（丸善、2009）17,000円＋税																																																																																																																																
成績評価の方法及び評価割合	評価方法		割合	目標1	目標2	目標3	目標4	目標5	目標6	目標7	目標8	目標9	目標10																																																																																																																				
	定期試験		50%	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○																																																																																																																				
	課題レポート		50%	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○																																																																																																																				
注意事項	1年次に履修した解剖学、生理学、生化学、病理学をしっかりと復習しておくこと。																																																																																																																																
備考	令和3年6月3日開講（全8回）																																																																																																																																
リンク	URL																																																																																																																																

担当教員の 実務経験の 有無	○
教員の実務 経験	臨床医（整形外科，消化器内科，小児科）
実務経験を いかした教 育内容	実臨床に即した教育を心掛けたい。

ナンバリング		授業科目名(科目の英文名)					区分・【新主題】/(分野)									
H0308222		臨床医学Ⅰ-1 (Clinical Medicine I-1 (Internal Medicine))					基礎系									
必修選択	単位	対象年次	学部	学期	曜・限	担当教員										
理学療法コース必修	1	2年	福祉健康科学部	前期		氏名 見玉雅明 E-mail kodm@ita-u.ac.jp 内線 6113										
授業の概要 医学を学ぶ上で疾患、特に内科領域の疾患は頻度が高くその範囲も多岐にわたる。内科学における主要疾患の概念、病因、症状、診断法、治療法などを概説する。理学療法学・心理学・社会福祉学の専門科目を学ぶ上で必要な疾病に対する医学的な知識を理解し、多面的視野と総合的判断力を身につけることを目標とする。消化器疾患・循環器疾患・呼吸器疾患・神経疾患・内分泌異常・糖代謝異常・膠原病・腎臓疾患の主な疾患について病態、症状、治療、予後などを学習する。 リハビリテーションを行うに当たり、原疾患としての内科学的病態、発生機序、症候を理解するとともに、内臓疾患に関する生理、病態生理を理解し、疾患の予防を学び理解する。これによりリハビリテーションにおける目的、目標を明確にする。																
具体的な到達目標						DP等の対応(別表参照)										
目標1 臨床医学に関連する循環器系疾患に関する病態および臨床像を説明できる						1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	
目標2 臨床医学に関連する呼吸器系疾患に関する病態および臨床像を説明できる						○	○	○								
目標3 臨床医学に関連する消化器系、腎泌尿器系、血液系疾患に関する病態および臨床像を説明できる						○	○	○								
目標4																
目標5																
目標6																
目標7																
目標8																
目標9																
目標10																
授業の内容																
1 循環器疾患① 心不全の病態																
2 循環器疾患② 弁膜症																
3 循環器疾患③ 先天性心疾患、その他心疾患																
4 循環器疾患④ 不整脈、心電図について																
5 循環器疾患⑤ 虚血性心疾患																
6 呼吸器疾患① 呼吸機能と呼吸器疾患症候																
7 呼吸器疾患② 閉塞性換気障害、拘束性換気障害																
8 呼吸器疾患③ 呼吸器感染症																
9 消化器疾患① 上部消化管疾患																
10 消化器疾患② 下部消化管疾患																
11 消化器疾患③ 肝胆器疾患																
12 血液疾患① 造血器腫瘍																
13 血液疾患② 様々な血液疾患																
14 腎疾患① 腎疾患の症候、糸球体腎炎																
15 腎疾患② 腎不全																
ラーニング	A:知識の定着・確認	○	スライドによる画像、動画の供覧。また具体的症例を通じて病態、疾患を考えさせる項を設ける。重要領域において、疾患に関する症例検討、レポートを課す。実際の症例について調べることにより病態、疾患に関する理解を深める。						工夫その他の	講義に関して、理解しやすいように各分野のポイントを絞ったプリントを作成し配布する。教科書ではわかりにくい点をより理解しやすいように工夫する。資料内の重要項目は空欄にし各自調べることで理解度を高めやすくする。						
時間外学習の内容と時間の目安	準備 次回講義内容の領域について、教科書、参考書を用いて概要を把握する(15h)。															
事後学習	講義された内容に関して、教科書、参考書などをもちい配布された資料の空欄を埋めることにより完成させ、より知識の理解、定着を行う(15h)。															
教科書	内科学 第4版 (シリーズ 標準理学療法学・作業療法学 専門基礎分野) 医学書院 2020年 ISBN 978-4-260-04290-1															
参考書	内科診断学 第3版 医学書院 2016年 ISBN 978-4-260-02064-0、新臨床内科学 [デスク判] 第10版 ISBN978-4-260-03806-5 [ポケット判] 第10版 医学書院 2020年 ISBN978-4-260-03807-2、内科学 (第11版) 2017年 ISBN978-4-254-32271-2 朝倉書店、「病気が見える」シリーズ、MEDICMEDIA 2017-2021年発行															
成績評価の方法及び評価割合	評価方法	割合	目標1	目標2	目標3	目標4	目標5	目標6	目標7	目標8	目標9	目標10				
症例検討レポート		10%	○	○	○											
期末試験(筆記試験)		90%	○	○	○											
すべてのレポートおよび期末試験の合格を単位取得の条件とする。																
注意事項	講義に使うスライドや資料は実際の症例を用いている場合が多い。不用意に写真にとったり複写をして、配布したり、また決してネットにあげることなどがないようにして下さい。															
備考	【地域創生教育科目】															
リンク	URL															

担当教員の 実務経験の有無	☐
教員の実務 経験	医師、内科おもに消化器内科またプライマリケア診療を大分大学医学部附属病院を中心に行ってきた。医師としての勤務歴は30年。
教員以外で 指導に関わ る実務経験 者の有無	☐
実務経験を いかした教 育内容	医師、内科医師として実際に行ってきた診療、症例経験を講義内容に盛り込むことにより、より実地に近い実践的な知識を与えることができる。

ナンバリング		授業科目名(科目の英文名)				区分・【新主題】/(分野)											
H030B223		臨床医学Ⅰ－2(Clinical MedicineⅠ-2 (Internal Medicine))				基礎系											
必修選択	単位	対象年次	学部	学期	曜・限	担当教員											
理学療法コース必修	1	2年	福祉健康科学部	後期		氏名 兒玉雅明											
						E-mail kodm@oita-u.ac.jp 内線 6113											
授業の概要																	
医学を学ぶ上で疾患、特に内科領域の疾患は頻度が高くその範囲也多岐にわたる。内科学における主要疾患の概念、病因、症状、診断法、治療法などを概説する。理学療法・心理学・社会福祉学の専門科目を学ぶ上で必要な疾病に対する医学的な知識を理解し、多面的視野と総合的判断力を身につけることを目標とする。がん、内分泌異常・糖代謝異常・膠原病・疾患、救急等の主な疾患について病態、症状、治療、予後などを学習する。 リハビリテーションを行うに当たり、原疾患としての内科学的病態、発生病序、症候を理解するとともに、内臓疾患に関する生理、病態生理、画像診断を理解し、疾患の予防を学び理解する。これによりリハビリテーションにおける目的、目標を明確にする。																	
具体的な到達目標						DP等の対応(別表参照)		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
目標1 臨床医学に関連する悪性腫瘍に関する病態および臨床像を説明できる								○	○	○							
目標2 臨床医学に関連する内分泌・膠原病疾患に関する病態および臨床像を説明できる								○	○	○							
目標3 臨床医学に関連する救急疾患の病態を説明できる								○	○	○							
目標4																	
目標5																	
目標6																	
目標7																	
目標8																	
目標9																	
目標10																	
授業の内容																	
1 腫瘍系疾患① がん診断、治療総論																	
2 腫瘍系疾患② 呼吸器系腫瘍																	
3 腫瘍系疾患③ 消化器系腫瘍																	
4 腫瘍系疾患④ 消化器系、その他腫瘍																	
5 内分泌疾患① 下垂体、甲状腺																	
6 呼吸器疾患① 副甲状腺、副腎																	
7 アレルギー・膠原病疾患																	
8 内科的救急疾患																	
9																	
10																	
11																	
12																	
13																	
14																	
15																	
ラーニング		A:知識の定着・確認		○ スライドによる画像、動画の供覧。また具体的症例を通じて病態、疾患を考えさせる項を設ける。重要領域において、疾患に関する症例検討、レポートを課す。実際の症例について調べることにより病態、疾患に関する理解を深める。		工夫 その他		講義に関して、理解しやすいように各分野のポイントを絞ったプリントを作成し配布する。教科書ではわかりにくい点をより理解しやすいように工夫する。資料内の重要項目は空欄にし各自調べることで理解度を高めやすくする。									
時間外学習の内容と時間の目安		準備学習		次回講義内容の領域について、教科書、参考書を用いて概要を把握する(15h)。													
		事後学習		講義された内容に関して、教科書、参考書などをもち配布された資料の空欄を埋めることにより完成させ、より知識の理解、定着を行う(15h)。													
教科書		内科学 第4版 (シリーズ 標準理学療法学・作業療法学 専門基礎分野) 医学書院 2020年 ISBN 978-4-260-04290-1															
参考書		内科診断学 第3版 医学書院 2016年 ISBN 978-4-260-02064-0、新臨床内科学「デスク判」第10版ISBN978-4-260-03806-5 [ポケット判] 第10版 医学書院 2020年 ISBN978-4-260-03807-2、内科学(第11版) 2017年 ISBN978-4-254-32271-2 朝倉書店、「病気が見える」シリーズ、MEDICMEDIA 2017-2021年発行															
成績評価の方法及び評価割合	評価方法				割合	目標1	目標2	目標3	目標4	目標5	目標6	目標7	目標8	目標9	目標10		
	症例検討レポート				90%	○	○	○									
	期末試験(筆記試験)				10%	○	○	○									
すべてのレポートおよび期末試験の合格を単位取得の条件とする。																	
注意事項		講義に使うスライドや資料は実際の症例を用いている場合が多い。不用意に写真にとったり複写をして、配布したり、また決してネットにあげることなどがないようにして下さい。															
備考		前期 臨床医学Ⅰ-2と合わせ全身臓器を学ぶ															
リンク		URL															

担当教員の 実務経験の 有無	○
教員の実務 経験	医師、内科おもに消化器内科またプライマリケア診療を大分大学医学部附属病院を中心に行ってきた。医師としての勤務歴は30年。
教員以外で 指導に関わ る実務経験 者の有無	○
実務経験を いかした教 育内容	医師、内科医師として実際に行ってきた診療、症例経験を講義内容に盛り込むことにより、より実地に近い実践的な知識を与えることができる。

ナンバリング		授業科目名(科目の英文名)				区分・【新主題】/(分野)						
H0308224		臨床医学II-1 (Clinical Medicine II-1 (Orthopedic Surgery))				基礎系						
必修選択	単位	対象年次	学部	学期	履・限	担当教員						
必修	1	2	福祉健康科学部	前期		氏名 片岡 晶志 E-mail mkataoka@olta-u.ac.jp 内線 7457						
授業の概要 運動器疾患に対する社会的認知度が増すにつれ、その治療法も高度に専門化してきている。正確な診断をつけ適切な治療法を選択し高度な技術を正確に施すためには、運動器に対する解剖・生理学などの基礎知識に始まり、治療のゴール設定やそれを達成する手術法・リハビリテーションなど幅広い知識が求められる。運動器疾患に対する治療法の選択基準などを実際の臨床症例を基に学び、科学的な判断力を養うとともに最新の治療法の進歩についての知識を身につけることを目的とする。												
具体的な到達目標						DP等の対応(別表参照)						
目標1	運動器疾患の基礎となる骨・関節、筋・神経の解剖、生理、生化学、病理について説明できる。					1	2					
目標2	運動器疾患の症状、徴候、病態生理、診断、治療法、予後について説明できる。					3	4					
目標3	知識、技術のみでなく、医療人としての心がまえ、態度を説明できる。					5	6					
目標4						7	8					
目標5						9	10					
目標6												
目標7												
目標8												
目標9												
目標10												
授業の内容												
1	整形外科疾患各論：肩関節・肘関節											
2	整形外科疾患各論：手関節および手指											
3	整形外科疾患各論：頸椎											
4	整形外科疾患各論①整形外科疾患各論：胸椎・腰椎											
5	整形外科疾患各論②整形外科疾患各論：股関節 試験											
6	整形外科疾患各論：膝関節											
7	整形外科疾患各論：足関節・足趾											
8	整形外科外傷学：軟部組織損傷、骨折・脱臼											
9	整形外科外傷学：脊椎・脊髄損傷											
10	絞扼性神経障害・外傷性末梢神経損傷 試験											
11	付随性疾患											
12	関節リウマチ											
13	スポーツ傷害											
14	運動器疾患と疼痛①											
15	運動器疾患と疼痛② 試験											
ラーニング	A:知識の定着・確認 ☐ 1) 理解度、到達度を確認するためテストを3回おこない、フィードバックする。 B:意見の表現・交換 ☐ 2) 疾患概念の理解を最重要目標におく。 C:応用志向 ☐ 3) レポートを課す(課題あり) D:知識の活用・創造 ☐					工夫	その他の					
時間外学習	準備 該当する範囲の予習をおこなうこと(15h)											
事後学習	復習を必ずおこなうこと(30h)											
教科書	標準整形外科学(第14版)井藤栄二他 編集 医学書院 2020年 絵で見る脳と神経 しくみと障害のメカニズム 馬場元毅 著 医学書院 2019年											
参考書												
成績評価の方法及び評価割合	評価方法	割合	目標1	目標2	目標3	目標4	目標5	目標6	目標7	目標8	目標9	目標10
	テスト	100%	○	○	○							
	5回講義がおわると対面テストを行います。											
注意事項	予習、復習を行うこと。症例検討のレポートは必ず提出すること。レポートをすべて提出していない場合は、テストでの評価は行いません											
備考	授業中に、スライドをつかって実際の症例を紹介する。 【地域創生教育科目】											
リンク	URL											

担当教員の 実務経験の 有無	○
教員の実務 経験	医師として診療業務に携わっている
実務経験を いかした教 育内容	実臨床での症例を供覧する

ナンバリング		授業科目名(科目の英文名)					区分・【新主題】/(分野)									
H030B225		臨床医学Ⅱ-2(Clinical MedicineⅡ-2 (Orthopedic Surgery))					基礎系									
必修選択	単位	対象年次	学部	学期	曜・限	担当教員										
必修	1	2	福祉健康科学部	後期		氏名 片岡 晶志 E-mail .mkataoka@oita-u.ac.jp 内線 7457										
授業の概要 運動器疾患に対する社会的認知度が増すにつれ、その治療法も高度に専門化してきている。正確な診断をつけ適切な治療法を選択し高度な技術を正確に施すためには、運動器に対する解剖・生理学などの基礎知識に始まり、治療のゴール設定やそれを達成する手術法・リハビリテーションなど幅広い知識が求められる。運動器疾患に対する治療法の選択基準などを実際の臨床症例を基に学び、科学的な判断力を養うとともに最新の治療法の進歩についての知識を身につけることを目的とする。ここでは運動器疾患の画像診断について学ぶ																
具体的な到達目標						DP等の対応(別表参照)										
目標1	運動器疾患の基礎となる骨・関節、筋・神経の解剖、生理、生化学、病理について説明できる。					1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	
目標2	運動器疾患の症状、徴候、病態生理、診断、治療法、予後について説明できる。					○	○	○	○							
目標3	知識、技術のみでなく、医療人としての心がまえ、態度を説明できる。					○	○	○	○							
目標4																
目標5																
目標6																
目標7																
目標8																
目標9																
目標10																
授業の内容																
1	画像診断と病態①															
2	画像診断と病態②															
3	画像診断と病態③															
4	画像診断と病態④															
5	画像診断と病態⑤															
6	画像診断と病態⑥															
7	画像診断と病態⑦															
8	画像診断と病態⑧ 試験															
9																
10																
11																
12																
13																
14																
15																
16																
17																
18																
19																
20																
21																
22																
23																
24																
25																
26																
27																
28																
29																
30																
ラフ	A:知識の定着・確認	○	1)理解度、到達度を確認するためテストを3回おこない、フィードバックする。					工夫 その 他の	症例検討をおこなう。症例検討した内容を担当学生は発表し、グループ討議と意見を発表する。							
1ク	B:意見の表現・交換	○	2)疾患概念の理解を最重要目標におく。そのために、症例検討で、活													
ニ	C:応用志向	○	発な意見の発表を求める。													
ン	D:知識の活用・創造	○														
時間外学修の内容と時間の目安	準備学修	症例検討に該当する範囲の予習をおこなうこと(15h)														
	事後学修	復習を必ずおこなうこと(30h)														
教科書	標準整形外科学(第14版)井植栄二他 編集 医学書院 2020年 絵で見る脳と神経 しくみと障害のメカニズム 馬場元毅 著 医学書院 2019年															
参考書																

成績 評価 の 方 法 及 び 評 価 割 合	評価方法	割合	目標 1	目標 2	目標 3	目標 4	目標 5	目標 6	目標 7	目標 8	目標 9	目標 10
	テスト	100%	○	○	○							
8回日に試験を行います。その結果を踏まえて再試験を行う。後期がおわるまで月曜4限は予定を入れないこと。												
注意事項	予習、復習を行うこと。症例検討のレポートは必ず提出すること。レポートをすべて提出していない場合は、テストでの評価は起こいません											
備考	授業中に、スライドをつかって実際の症例を紹介する。 【地域創生教育科目】											
リンク												
	URL											
担当教員の 実務経験の 有無	○											
教員の实務 経験	医師として臨床をおこなっている											
実務経験を いかした教 育内容	実臨床での症例を供覧する											

ナンバリング		授業科目名(科目の英文名)					区分・【新主題】/(分野)					
H030B226		臨床医学Ⅲ-1 (Clinical Medicine Ⅲ-1)					基礎系					
必修選択	単位	対象年次	学部	学期	曜・限	担当教員						
必修	1	2	福祉健康科学部	前期		氏名 上田 徹						
						E-mail kamida@oita-u.ac.jp 内線						
授業概要 神経疾患により生じる機能障害や運動障害はリハビリテーションにおいて多くの割合を占めている。そのため、神経疾患について専門的知識を深め、神経疾患領域におけるリハビリテーションの役割を理解することが重要である。授業では、基礎となる神経症候学を学び、その上でリハビリテーションの適応となる様々な神経疾患の症状、病態、治療について概説する。												
具体的な到達目標						DP等の対応(別表参照)						
目標1	神経症候の特徴、病態生理を理解し説明できる。					1	2	3				
目標2	神経疾患の特徴、診断のポイントを理解し、その治療について説明できる					4	5	6				
目標3	神経疾患に対するリハビリテーション効果を理解し、患者の生活にどのように支援できるかを説明できる。					7	8	9				
目標4	さまざまな専門職とのかかわりの中で、リハビリテーションの観点からどのようなリーダーシップを発揮できるかを説明できる。					10						
目標5												
目標6												
目標7												
目標8												
目標9												
目標10												
授業の内容												
1 脳解剖と神経画像												
2 神経症候学Ⅰ (意識障害、大脳皮質、大脳基底核、辺縁系)												
3 神経症候学Ⅱ (脳幹、脳神経、小脳)												
4 神経症候学Ⅲ (運動、感覚、自律神経)												
5 脳血管障害Ⅰ												
6 脳血管障害Ⅱ												
7 脳腫瘍												
8 頭部外傷												
9 感染性疾患												
10 脱髄性疾患												
11 神経変性疾患Ⅰ												
12 神経変性疾患Ⅱ												
13 筋疾患Ⅰ												
14 筋疾患Ⅱ												
15 小児神経疾患												
ラーニング	A:知識の定着・確認 ☐ 演習、小テスト、グループ・ペアでの共同作業 B:意見の表現・交換 ☐ C:応用志向 ☐ D:知識の活用・創造 ☐					工夫	その他の	なし				
時間外学習の内容と時間の目安	準備 参考文献の情報を必要に応じて予習 (15時間) 事後 小テストや配布資料を用いて復習する (15時間)											
教科書	講義プリントを授業中配布。スライドを使って説明											
参考書	脳・神経、病気がみえる vol.7, MEDIC MEDIA出版 2011											
成績評価の方法及び評価割合	評価方法	割合	目標1	目標2	目標3	目標4	目標5	目標6	目標7	目標8	目標9	目標10
	小テスト	15%	☐	☐								
	最終試験	85%	☐	☐	☐	☐						
成績割合	すべての小テストおよび最終テストの合格が単位取得の条件とする。											
注意事項	なし											
備考	小テストの解説を割り当てられたグループで解説する。											
リンク	URL											

担当教員の 実務経験の 有無	○
教員の実務 経験	医学部附属病院での医師（脳神経外科学）
実務経験を いかした教 育内容	脳神経外科医としての実務経験をもち、神経症候学、神経疾患学、リハビリテーション学を解説する。

ナンバリング		授業科目名(科目の英文名)					区分・【新主題】/(分野)					
H030B227		臨床医学Ⅲ-2 (Clinical Medicine III-2)					基礎系					
必修選択	単位	対象年次	学部	学期	履・程	担当教員						
必修	1	2		後		氏名 黒木 洋美 (非常勤講師)						
						E-mail 内線						
授業の概要 救急医学における頭部外傷(頭蓋内出血、脳挫傷)の病態と治療、社会復帰までの経過について学習する。ここでも脳の画像を講義にふんだんに取り入れることで、臨床現場での臨床症状と画像所見の一致が確認できることを目指す。												
具体的な到達目標						DP等の対応(別表参照)						
目標1	画像診断を説明できる					1	2	3				
目標2	病態を説明できる					4	5	6				
目標3	治療が説明できる					7	8	9				
目標4	予後が説明できる					10						
目標5												
目標6												
目標7												
目標8												
目標9												
目標10												
授業の内容												
1	画像診断と治療①: 脳出血 実際の画像と障害の変化、対応するリハビリテーションを学ぶ(急性期~回復期)											
2	画像診断と治療②: 脳梗塞 実際の画像と障害の変化、対応するリハビリテーションを学ぶ(急性期~回復期)											
3	画像診断と治療③: 脳血管障害 実際の画像と障害の変化、対応するリハビリテーションを学ぶ(回復期~生活期/維持期)											
4	画像診断と治療④: 頭部外傷、その他: 実際の画像と障害の変化、対応するリハビリテーションを学ぶ(急性期~回復期~生活期)											
5	画像診断と治療⑤: 変性疾患、進行性疾患、脱髄性疾患等: 疾患、病態、画像やデータを理解してリハビリテーションを考える											
6	画像診断と治療⑥: 変性疾患、進行性疾患、脱髄性疾患等: 疾患、病態、画像やデータを理解してリハビリテーションを考える											
7	画像診断と治療⑦: 認知機能低下(認知症)、高次脳機能障害: 疾患、病態、画像やデータを理解してリハビリテーションを考える											
8	画像診断と治療⑧: 画像、検査データ、治療(手術含む)の内容からリハビリテーションを考える(横断的な考察)、その他											
9												
10												
11												
12												
13												
14												
15												
ラ	A:知識の定着・確認	☐	症例や画像、データ等を提示し、診断、病態、症状、治療、予後(後遺症)について学習する。臨床上のリハビリテーション治療計画の組み立て方、進め方を学ぶ。	工夫	教科書、スライドと配布プリント。随時、グループディスカッションを行う。							
ク	B:意見の表現・交換	☐		工夫								
ニ	C:応用志向	☐		工夫								
テ	D:知識の活用・創造	☐		工夫								
グ												
時間外学習	準備	事前学習15時間										
の内容と時間	学修											
の目安	事後	事後学修30時間										
	学修											
教科書	脳・神経、病気がみえる(第2版) 医療情報科学研究所編集 メディックメディア 2017年、絵で見る脳と神経 しきみと障害のメカニズム 馬場元毅 著 医学書院 2019年											
参考書	最新リハビリテーション医学(第3版) 安保雅博 著 医歯薬出版 2016年											
成績評価の方法及び評価割合	評価方法	割合	目標1	目標2	目標3	目標4	目標5	目標6	目標7	目標8	目標9	目標10
	試験	100%	○	○	○	○						
注意事項												
備考												
リンク	URL											

ナンバリング		授業科目名(科目の英文名)					区分・【新主題】/(分野)														
H030B201		理学療法概論(Principle of Physical Therapy)																			
必修選択	単位	対象年次	学部	学期	曜・限	担当教員															
必修	1	2年	福祉健康科学部	前期		氏名 朝井政治 E-mail na-asai@olta-u.ac.jp 内線 7551															
授業の概要												理学療法の歴史、法律、社会における理学療法士の役割と職域など、理学療法全般について学習する。実習の振り返りやグループ討議を交え、障害構造と理学療法の関係、理学療法の実際について理解を深めるとともに、理学療法の今後の在り方や自分自身の理学療法士としての将来を展望する。									
具体的な到達目標												DP等の対応(別表参照)									
目標1	理学療法の対象や役割、方法について説明する。						1	2	3	4	5	6	7	8	9	10					
目標2	理学療法士の適正について自身を振り返り、自己課題を抽出する。						1	2	3	4	5	6	7	8	9	10					
目標3	理学療法士の組織・関連法規、理学療法士の現状と今後の課題について説明する。						1	2	3	4	5	6	7	8	9	10					
目標4	評価の目的、過程、対象について説明する。						1	2	3	4	5	6	7	8	9	10					
目標5	事例について、情報収集、問題点抽出、ゴール設定をする。						1	2	3	4	5	6	7	8	9	10					
目標6																					
目標7																					
目標8																					
目標9																					
目標10																					
授業の内容																					
1 理学療法の概念と歴史																					
2 理学療法士を目指す学生に求められるもの(グループワーク、発表)																					
3 リスクマネジメント・情報管理、理学療法の意義と役割																					
4 理学療法の対象と評価(総論:目的、過程、時期、記録、一般的評価事項:ICF)																					
5 理学療法の進め方と治療(情報収集、問題点抽出、ゴール設定)																					
6 事例検討(グループワーク、発表、まとめ)																					
7 特別講義:「理学療法士の現状と課題」(外部講師)																					
8 様々な福祉用具と介助法について:一部演習を含む																					
9																					
10																					
11																					
12																					
13																					
14																					
15																					
ラーニンググループ	A:知識の定着・確認					工夫その他の	講義だけでなく、グループワークや演習を積極的に取り入れる。														
	B:意見の表現・交換																				
	C:応用志向																				
	D:知識の活用・創造																				
時間外学習の内容と時間の目安		準備 1年次の基礎臨床実習Ⅰの経験を活かして、グループ学習において積極的に参加できるように準備する。(1時間) 事後 各回の講義の予習(1時間×7回) 事後 医療・福祉・教育・研究等、リハビリテーションや理学療法に関する情報に興味をもち資料を収集する。 事後 課題への取り組み。(合計8時間)																			
教科書		有馬慶美 編、概説 理学療法概論 第2版 (文光堂)、2015																			
参考書		奈良聡 編集主幹、木林勉ら 編、実学としてのリハビリテーション概論 (文光堂)、2015 馬場元毅 著、絵で見る 脳と神経 (第4版) 医学書院、2017																			
成績評価の方法及び評価割合	評価方法					割合	目標1	目標2	目標3	目標4	目標5	目標6	目標7	目標8	目標9	目標10					
	グループ学習での態度・成果物・発表					30%	○	○		○	○										
	個人発表用スライド・発表					25%	○														
	「理学療法士の現状と課題」に関するレポート					20%			○												
	事例レポート					25%				○	○										
注意事項																					
・1年次の基礎臨床実習Ⅰの際の学習成果物(レポートやディリーノート、学習ノートなど)を持参すること。 ・グループワークでは活発な相互交流をはかり、実習経験の充実、深化を図ること。																					
備考		なし																			
リンク		URL																			

担当教員の 実務経験の有無	○
教員の実務 経験	理学療法士
教員以外で 指導に関わ る実務経験 者の有無	○
教員以外の 指導に関わ る実務経験 者	理学療法士
実務経験を いかした教 育内容	理学療法史の歴史、法律、社会における理学療法士の役割と職域など、理学療法全般について講義する。 情報収集→問題点抽出→ゴール設定の評価プロセスや理学療法の実践について解説する。

ナンバリング		授業科目名(科目の英文名)					区分・【新主題】/(分野)										
H0308251		理学療法評価学Ⅰ(Evaluation of Physical Therapy Ⅰ)															
必修選択	単位	対象年次	学部	学期	履・限	担当教員											
必修	1	2年	福祉健康科学部	前期		氏名 川上健二・田中健一郎											
						E-mail kenji-kawakami@oita-u.ac.jp , tanaka-kenichiro@oita-u.ac.jp 内線 7118 (川上)											
授業概要 運動機能の基本的評価を学習する。問診等の情報収集、身体観察、身体計測について、各検査のもつ意義と評価の方法を学習する。さらに、関節可動域検査と筋力検査(徒手筋力検査、筋持久力検査)について検査の意義と目的、実施する上での注意点や禁忌、評価していくプロセスについて学ぶ。さらにそれぞれの評価のつながりについて理解を深める。																	
具体的な到達目標						DP等の対応(別表参照)	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	
目標1 一般的な評価の意義と目的、流れについて説明できる。							○										
目標2 形態計測における意義・目的、方法を理解し、結果の解釈について説明できる。							○										
目標3 関節可動域検査における意義・目的、方法を理解し、結果の解釈について説明できる。							○										
目標4 筋力検査における意義・目的、方法を理解し、結果の解釈について説明できる。							○										
目標5 各種評価のつながりについて説明できる。							○										
目標6																	
目標7																	
目標8																	
目標9																	
目標10																	
授業の内容																	
1 評価学総論(評価の目的、流れ等)、医家面接、形態計測総論																	
2 形態計測の実践1																	
3 形態計測の実践2																	
4 形態計測の実践3 関節可動域検査総論																	
5 関節可動域検査の実践1(上肢)																	
6 関節可動域検査の実践2(上肢)																	
7 関節可動域検査の実践3(下肢)																	
8 関節可動域検査の実践4(体幹ほか)、筋力検査総論																	
9 総合演習1																	
10 徒手筋力検査の実践1(上肢・肩甲帯)																	
11 徒手筋力検査の実践2(上肢)																	
12 徒手筋力検査の実践3(下肢)																	
13 徒手筋力検査の実践4(体幹ほか)																	
14 総合演習2																	
15 総合演習3																	
ラ	A:知識の定着・確認	○	学生をグループに分け、実際の評価について解説、デモンストレーションを実施してもらう														
ク	B:意見の表現・交換	○															
ニ	C:応用志向																
テ	D:知識の活用・創造	○															
イ	工	夫	模範症例をもとにデモンストレーションや技術の振り返りを実施し、理解度を確認する 初回に解剖学、運動学に関する知識振り返りを行い、必要な知識が習得できているか確認する。														
時間外学習の内容と時間の目安																	
準備 解剖学、運動学の復習をして授業に臨むこと(5時間)。																	
学習 各評価法の実施方法について予習しておくこと(毎回1時間)。																	
事後 評価法に関する知識と実施方法について、復習を行い理解しておくこと(毎回1時間)																	
教科書																	
1) 理学療法評価法 第6版(金原出版) 松澤正・江口勝彦 2018																	
2) 新・徒手筋力検査法 原著第10版(協同医書出版社) Dale Avers, Marybeth Brown 2020																	
参考書																	
リハビリテーション・ポケットナビ 今日からなれる! 評価の達人(中山書店) 玉木彰・高橋仁美 2015																	
成績評価の方法及び評価割合	評価方法	割合	目標1	目標2	目標3	目標4	目標5	目標6	目標7	目標8	目標9	目標10					
成績評価の方法及び評価割合	課題(簡易資料提出・発表)	10%	○	○	○	○	○										
	知識振り返り(形態測定ROM)	10%	○	○	○	○	○										
	知識振り返り(MMT)	10%	○	○	○	○	○										
	筆記試験	70%	○	○	○	○	○										
注意事項	履修時は、実習着を着用し、治療者として相応しい身だしなみを心掛けること。 評価器具を必ず持参すること。																
備考																	
リンク	URL																

担当教員の 実務経験の有無	○
教員の実務 経験	理学療法士
実務経験を いかした教 育内容	理学療法の評価（特に形態計測、関節可動域測定、徒手筋力検査）に関する講義、演習を模擬症例を提示していく。

ナンバリング		授業科目名(科目の英文名)				区分・【新主題】/(分野)						
H030B255		理学療法評価学Ⅰ実習(Practice of Evaluation Ⅰ)										
必修選択	単位	対象年次	学部	学期	履・限	担当教員						
必修	2	2年	福祉健康科学部	前期		氏名 川上健二 ・ 田中健一朗 E-mail kenji-kawakami@oita-u.ac.jp , tanaka-kenichiro@oita-u.ac.jp 内線 7118(川)						
授業の概要 種々の運動機能検査で使用する機器の使用法の理解し、学生同士で関節可動域検査、筋力検査、形態測定を主体としたアクティブラーニングにて実習を行う。また、具体的な症例を提示しながら、模擬的に検査・測定を実施し、患者の障害像やリスク管理を踏まえた検査手法を学修し、理学療法における評価の意味やその位置付け、および具体的な技術について学習する。												
具体的な到達目標												
目標1 各検査の目的を述べることができる。												
目標2 各検査の手順が説明できる。												
目標3 学生同士による演習方式で検査を実施できる。												
目標4 各種疾患を想定した模擬症例に対して評価を実施する際のリスク管理を実施できる												
目標5												
目標6												
目標7												
目標8												
目標9												
目標10												
授業の内容												
1 形態計測総論、体表解剖に関する知識の確認、問診の実際												
2 形態計測の実際1												
3 形態計測の実際2												
4 形態計測の実際3、関節可動域検査総論												
5 関節可動域検査の実際1(上肢)												
6 関節可動域検査の実際2(上肢)												
7 関節可動域検査の実際3(下肢)												
8 関節可動域検査の実際4(体幹ほか)												
9 技術振り返り(形態計測、関節可動域検査)												
10 筋力検査総論、徒手筋力検査の実際1(上肢・肩甲骨)												
11 徒手筋力検査の実際2(上肢)												
12 徒手筋力検査の実際3(下肢)												
13 徒手筋力検査の実際4(体幹ほか)												
14 技術振り返り(徒手筋力検査)												
15 総合演習												
ラーニング	A:知識の定着・確認	☐ 学生同士による演習、模擬患者によるデモンストレーションを実施する。				工夫	その他の					
	B:意見の表現・交換	☐										
	C:応用志向											
	D:知識の活用・創造											
時間外学習の内容と時間の目安	準備	各評価技術の理解と習熟を目指し、十分な予習をすること。										
	事後	各評価技術の理解と習熟を目指し、十分な復習をすること。										
教科書	1) 理学療法評価法 第6版(金原出版) 松澤正・江口勝彦 2018 2) 新・徒手筋力検査法 原著第10版(協同医学出版社) Dale Avers, Marybeth Brown 2020											
参考書	その都度、紹介する。											
成績評価の方法及び評価割合	評価方法	割合	目標1	目標2	目標3	目標4	目標5	目標6	目標7	目標8	目標9	目標10
	実技試験	80%	☐	☐	☐	☐						
	小テスト	20%	☐	☐	☐	☐						
注意事項	履修時は、実習着を着用し、治療者として相応しい身だしなみを心掛けること。 評価器具を必ず持参すること。											
備考	実技試験1は第1回～15回までの講義内容に関する実技試験											
リンク	URL											

担当教員の 実務経験の 有無	○
教員の実務 経験	理学療法士
実務経験を いかした教 育内容	理学療法の評価全般に関する実習を行う。各評価法の学修後にその都度、模擬症例による振り返りを実施する。

ナンバリング		授業科目名(科目の英文名)					区分・【新主題】/(分野)															
H030B252		理学療法評価学Ⅱ(Evaluation of Physical Therapy Ⅱ)																				
必修選択	単位	対象年次	学部	学期	曜・限	担当教員																
必修	1	2年	福祉健康科学部	後期		氏名 菅田陽伸, 萬井太規 E-mail hsugata@olta-u.ac.jp, man1-hiroki@olta-u.ac.jp 内線 7671(菅田)、6109(萬井)																
授業の概要																						
神経・生理機能の基本的評価(バイタルサイン・意識の評価、筋緊張検査、反射検査、感覚検査、脳神経検査、認知・高次脳検査)について学習する。各検査の意義と目的、方法と手順、留意点、さらにそれぞれの評価のつながりについて理解を深める。																						
具体的な到達目標																						
DP等の対応(別表参照)																						
目標1	バイタルサイン・意識の評価の目的や方法を理解し、結果の解釈について説明できる。										1	2	3	4	5	6	7	8	9	10		
目標2	筋緊張検査、反射検査の目的や方法を理解し、結果の解釈について説明できる。										○											
目標3	感覚検査の目的や方法を理解し、結果の解釈について説明できる。										○											
目標4	脳神経検査の目的や方法を理解し、結果の解釈について説明できる。										○											
目標5	高次脳機能検査の目的や方法を理解し、結果の解釈について説明できる。										○											
目標6	脳画像(CT・MRI)を理解し、画像から障害予測を行うことができる。										○											
目標7																						
目標8																						
目標9																						
目標10																						
授業の内容																						
1 神経系に関する基礎知識確認																						
2 医療面接と情報収集																						
3 意識障害・全身状態の評価																						
4 感覚検査①(表在感覚、深部感覚)																						
5 感覚検査②(疼痛別)																						
6 筋緊張検査																						
7 反射検査①(深部反射)																						
8 反射検査②(表在反射、病的反射)																						
9 協調性検査、姿勢バランス検査																						
10 脳神経検査①(総論、各論:脳神経Ⅰ～Ⅴ)																						
11 脳神経検査②(各論:脳神経Ⅵ～Ⅺ)																						
12 高次脳機能検査①(総論、各論:言語、認知、記憶)																						
13 高次脳機能検査②(各論:失行、失読)																						
14 痛みの評価、意欲・自己効力感、気分(うつ・不安)・思考の評価																						
15 脳画像(CT・MRI)解釈																						
ラーニング	A:知識の定着・確認 B:意見の表現・交換 C:応用志向 D:知識の活用・創造										○	事前の知識確認や単元ごとの振り返り(小テスト)を用いた診断的/形成的評価を実施する。 基本的な疾患を想定し、具体的な評価方法を思考する。 ペアやグループによる意見交換、問題解決を図る。										
工夫											○	毎回の講義で小テストを行い、知識の定着を図る。										
その他																						
時間外学習の内容と時間の目安	準備 各検査の意義・目的につながる神経解剖・生理について十分な予習をして臨むこと(1h×15回=15h) 事後 理学療法評価学実習において検査が実施できるよう方法・手順について十分な復習をすること(1h×15回=15h)																					
教科書	1) 理学療法評価学 改定第6版(金原出版)、松澤 正・江口 勝彦著、2018年発行 2) ベッドサイド神経のみかた 第18版(南山堂)、田崎義昭・斎藤佳雄著、2016年発行																					
参考書	その都度、紹介する。																					
成績評価の方法及び評価割合	評価方法										割合	目標1	目標2	目標3	目標4	目標5	目標6	目標7	目標8	目標9	目標10	
	講義ごとの小テスト										20%	○	○	○	○	○	○					
	期末テスト										80%	○	○	○	○	○	○					
注意事項	履修時は、実習着を着用し、治療者として相応しい身だしなみを心掛けること。 評価器具は必ず持参すること。																					
備考	なし。																					
リンク	URL																					

担当教員の 実務経験の 有無	○
教員の実務 経験・	理学療法士
実務経験を いかした教 育内容	神経・生理機能に関する基本的な理学療法評価の目的や方法、結果の解釈について開発する。

ナンバリング		授業科目名(科目の英文名)				区分・【新主題】/(分野)	
H0308256		理学療法評価学Ⅱ実習(Practice of Evaluation Ⅱ)					
必修選択	単位	対象年次	学部	学期	曜・限	担当教員	
必修	2	2年	福祉健康科学部	後学期		氏名 菅田 陽伶、萬井 太規 E-mail hsugata@oita-u.ac.jp, mani-hiroki@oita-u.ac.jp 内線 7671 (菅田)、6109 (萬井)	
授業の概要 理学療法における評価の意味やその位置付け、および具体的技術について学習する。							
具体的な到達目標						DP等の対応(別表参照)	1 2 3 4 5 6 7 8 9 10
目標1	各検査の目的を述べるができる。					○	
目標2	各検査の手順が説明できる。					○	
目標3	学生同士による演習方式で検査を実施できる。					○	
目標4	各種疾患を想定した模擬症例に対して評価を実施する際のリスク管理を実施できる					○	
目標5							
目標6							
目標7							
目標8							
目標9							
目標10							
授業の内容							
1	神経系に関する基礎知識の確認、車椅子・杖の操作体験						
2	医療面接と情報収集の実践						
3	意識障害・全身状態の評価						
4	感覚検査の実践1						
5	感覚検査の実践2						
6	筋緊張検査の実践						
7	反射検査の実践1						
8	反射検査の実践2						
9	協調性検査、姿勢バランス検査の実践						
10	脳神経検査の実践1						
11	脳神経検査の実践2						
12	高次脳機能検査の実践1						
13	高次脳機能検査の実践2						
14	痛みの評価、意欲・自己効力感、気分(うつ・不安)・思考の評価の実践						
15	脳画像(CT・MRI)解釈の実践						
16							
17							
18							
19							
20							
21							
22							
23							
24							
25							
26							
27							
28							
29							
30							
ラーニング 目標	A:知識の定着・確認 ○ 学生同士による演習、模擬患者によるデモンストレーションを実施する。 B:意見の表現・交換 ○ C:応用志向 D:知識の活用・創造					工夫 その他	
時間外学習 の内容と時間 の目安	準備 学習 各評価技術の理解と習熟を目指し、十分な予習をすること (1h×15回=15h) 事後 学習 各評価技術の理解と習熟を目指し、十分な復習をすること (1h×15回=15h)						
教科書	理学療法評価学 改定第6版(金原出版)、松澤 正・江口 勝彦著、2018年発行						
参考書	1) ベッドサイド神経のみかた 第18版(南山堂)、田嶋義昭・斎藤佳雄著、2016年発行 2) リハビリテーション基礎評価学 第2版(羊土社)、潮見泰蔵・下田信明編集、2020年発行						

成績評価の方法及び評価割合	評価方法	割合	目標1	目標2	目標3	目標4	目標5	目標6	目標7	目標8	目標9	目標10	
	実技試験（口頭試問含む）	100%	○	○	○	○							
注意事項	履修時は、実習着を着用し、治療者として相応しい身だしなみを心掛けること。 評価器具を必ず持参すること。												
備考													
リンク	URL												
担当教員の 実務経験の有無	○												
教員の 実務経験	理学療法士												
実務経験を いかした 育内容	理学療法の評価全般に関する実習を行う。各評価法の学修後にその都度、模擬症例による振り返りを実施する。												

ナンバリング		授業科目名(科目の英文名)				区分・【新主題】/(分野)														
H030B243		運動器系理学療法Ⅰ(Physical therapy for musculoskeletal disordersⅠ)																		
必修選択	単位	対象年次	学部	学期	曜・限	担当教員														
必修	1	2	福祉健康科学部	後期		氏名 川上健二, 阿南雅也 E-mail kenji-kawakami@oita-u.ac.jp (川上), anan-masaya@oita-u.ac.jp (阿南) 内線 7118														
授業の概要 運動器系疾患に対する理学療法は、身体に障害や機能低下がある場合、その機能を回復または維持させるために、身体運動を科学的に適用しなければならない。本講義では、まず、運動学、解剖学、生理学の知識をベースとして、運動器系疾患の理学療法の概要、関節可動域の改善、筋機能障害の改善等に用いられる理学療法の知識を学ぶ。さらに、いくつかの四肢および脊柱の運動器系疾患についての具体的な理学療法について実技を交えて学習することで理解を深める。																				
具体的な到達目標																				
DP等の対応(別表参照)																				
目標1	関節可動域の改善、筋機能障害の改善等に用いられる理学療法の知識を説明できる					○														
目標2	各運動器疾患の病態を説明できる					○														
目標3	各運動器系疾患に対する評価方法を説明できる					○														
目標4	各運動器系疾患に対する理学療法を説明できる					○														
目標5																				
目標6																				
目標7																				
目標8																				
目標9																				
目標10																				
授業の内容																				
1 運動療法の基礎 (阿南)																				
2 関節可動域制限に対する運動療法 (阿南)																				
3 関節可動域制限に対する運動療法 (阿南)																				
4 筋機能障害に対する運動療法 (阿南)																				
5 筋機能障害に対する運動療法 (阿南)																				
6 運動器系理学療法の概要 (川上)																				
7 骨折に対する理学療法① (川上)																				
8 骨折に対する理学療法② (川上)																				
9 骨折に対する理学療法③ (川上)																				
10 肩関節疾患に対する理学療法① (川上)																				
11 肩関節疾患に対する理学療法② (川上)																				
12 肩関節疾患に対する理学療法③ (川上)																				
13 腰部・脊椎疾患に対する理学療法① (川上)																				
14 腰部・脊椎疾患に対する理学療法② (川上)																				
15 腰部・脊椎疾患に対する理学療法③ (川上)																				
ラーニング 目標	A:知識の定着・確認 B:意見の表現・交換 C:応用志向 D:知識の活用・創造					○ 小テスト行う。また、少人数のグループに分けて、臨床上、頻繁に遭遇するであろう運動器疾患についての理学療法（問題点の抽出やそのゴール設定および理学療法プログラム）についてレポートを作成する。					工夫 その他の					グループ・ペアで実技を中心とした演習を取り入れる。				
時間外学習 の内容と時間 の目安		準備 学習 教科書および参考書を基に予習をする (30h)。 事後 学習 授業の内容を復習する (30h)。																		
教科書		・対馬栄輝・他：Crosslink理学療法テキスト 運動療法学，メジカルビュー，2020 ・加藤浩・他：Crosslink理学療法テキスト 運動器障害運動療法学，メジカルビュー，2020																		
参考書		・工藤慎太郎：運動機能障害の「なぜ？」がわかる評価戦略，医学書院，2017 ・森山英樹・他：運動器疾患の病態と理学療法，医歯薬出版，2015																		
成績 評価 の 方法 及 び 評 価 割 合	評価方法					割合	目標 1	目標 2	目標 3	目標 4	目標 5	目標 6	目標 7	目標 8	目標 9	目標 10				
	学期末試験					80%	○	○	○	○										
	小テスト					20%	○	○	○	○										
すべての項目の合格を単位取得の条件とする。																				
注意事項		履修時は、実技を行うこともあるため実習着もしくは動きやすい服装（ジーパン・スカートは禁）を着用すること。 評価器具（ゴニオメーターとメジャー）を持参すること。																		
備考																				
リンク		URL																		

担当教員の 実務経験の 有無	○
教員の实務 経験	理学療法士として、大学病院や地域の中核病院での実務経験を有する。
実務経験を いかした教 育内容	これまで経験した実際の症例を通して解説する。

ナンバリング		授業科目名(科目の英文名)					区分・【新主題】/(分野)													
H0308249		内部障害理学療法 I (Clinical Medicine I-1)																		
必修選択	単位	対象年次	学部	学期	曜・限	担当教員														
必修	1	2年	福祉健康科学部	後期		氏名 田中健一朗 E-mail tanaka-kenichiro@oita-u.ac.jp 内線 6232														
授業の概要	内部障害のなかでも循環分野における疾患とそれに伴って生じる障害像を学習し、治療および内部障害リハビリテーションの現状を学習する。目に見えない循環器疾患を理解するための病態解剖生理を再学習するとともに病態機能面も学習し、循環器疾患の障害について論じる。																			
具体的な到達目標	DP等の対応(別表参照)																			
目標1 循環器疾患の病態について説明できる。	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10										
目標2 循環器疾患患者に対する評価や、リスク管理について説明できる。	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10										
目標3 心臓リハビリテーション(特に運動療法)について説明できる。	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10										
目標4 具体的な運動処方ができる。	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10										
目標5																				
目標6																				
目標7																				
目標8																				
目標9																				
目標10																				
授業の内容																				
1 循環器総論																				
2 循環器系の機能・構造																				
3 心臓図の診かた																				
4 エネルギー代謝と栄養																				
5 運動耐容能と運動処方																				
6 病態・検査と治療 総論																				
7 病態・検査と治療 (虚血性心疾患)																				
8 病態・検査と治療 (心臓弁膜症と心筋症)																				
9 病態・検査と治療 (大動脈および末梢血管疾患)																				
10 病態・検査と治療 (心不全)																				
11 理学療法を実施する上でのリスク管理																				
12 心臓リハビリテーション総論																				
13 高齢社会と心疾患																				
14 症例検討①																				
15 症例検討②																				
ラ ブ ニ ン グ グ ラ フ	A:知識の定着・確認 B:意見の表現・交換 C:応用志向 D:知識の活用・創造					○講義に加え、ビデオ視聴、ディベート、学生による講義を取り入れる。 ○					工夫 その他 模擬症例を通して、病態、評価、治療の理解を深める。 講義内容の振り返りを適宜実施する。									
時間外学習 の内容と時 間の目安	準備 これまでの学習内容の復習 (5時間) 事後 各講義に復習を行う (各講義後に1時間) 学修																			
教科書	病気がみえる vol.2 循環器 (第4版) MEDIC MEDIA, 医療情報科学研究所, 2017																			
参考書	人体の構造と機能 (第3版) (医学書院) エレイン N. マリープ 2010 内部障害理学療法 医学書院 第2版 高橋 哲也・神津 玲・野村 卓生 2020																			
成績 評 価 の 方 法 及 び 評 価 割 合	評価方法	割合	目標 1	目標 2	目標 3	目標 4	目標 5	目標 6	目標 7	目標 8	目標 9	目標 10								
	課題レポート	10%	○	○	○	○														
	知識振り返り (確認テスト)	20%	○	○		○														
	筆記試験	70%	○	○	○	○														
注意事項	なし																			
備考	クォーター制で講義を行う可能性がある。 講義毎に確認テストを行う																			
リンク	URL																			

担当教員の 実務経験の 有無	○
教員の実務 経験	理学療法士
教員以外で 指導に関わ る実務経験 者の有無	○
教員以外の 指導に関わ る実務経験 者	理学療法士
実務経験を いかした教 育内容	循環器障害に対する理学療法について、具体例を提示しながら、講義やディスカッションを進める。

ナンバリング		授業科目名(科目の英文名)				区分・【新主題】/(分野)										
H0308250		内部障害理学療法Ⅱ(Physical Therapy for internal dysfunction Ⅱ)														
必修選択	単位	対象年次	学部	学期	曜・限	担当教員										
必修	1	2年	福祉健康科学部	後期		氏名 朝井政治 E-mail na-asai@olta-u.ac.jp 内線 7551										
授業の概要																
呼吸、代謝分野における理学療法の対象となる疾患と障害像を学習し、一般的な治療および内部障害系理学療法について学習する。さらに救急領域における内部障害についての理解を深めるために疾患特異性と理学療法の現状について概説する。																
具体的な到達目標																
IP等の対応(別表参照)																
目標1	呼吸、代謝を中心とした内科系疾患の病態、症状、治療法を説明できる。					1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	
目標2	理学療法を実施する上でのリスクの抽出と説明ができる。					1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	
目標3	内部障害を有する患者に対する理学療法に必要な評価、問題点抽出ができる。					1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	
目標4																
目標5																
目標6																
目標7																
目標8																
目標9																
目標10																
授業の内容																
1 総論(定義、疫学など)、呼吸器系の解剖・生理																
2 症候学と身体所見評価(発熱、咳、浮腫、体重減少、肥満、痛み、呼吸困難)																
3 理学療法を実施する上でのリスク管理																
4 呼吸器疾患に対する評価																
5 呼吸器疾患に対する理学療法																
6 症例検討(呼吸器疾患)																
7 身体の構造と機能:腎・代謝																
8 エネルギー代謝と栄養																
9 糖尿病に対する評価・理学療法																
10 腎機能障害に対する評価・理学療法																
11 症例検討(代謝系疾患)																
12 リハビリテーションの実践:寛解期・回復期																
13 リハビリテーションの実践:生活期																
14 リハビリテーションの実践:終末期																
15 症例検討																
ラーニング	A:知識の定着・確認 B:意見の表明・交換 C:応用志向 D:知識の活用・創造					○模擬症例を通して、病態、評価、治療の理解を深める。 ○講義に加え、ビデオ視聴、ディベート、学生による講義を取り入れる。					工夫 その他 講義内容の振り返りを適宜実施する。					
時間外学習の内容と時間の目安	準備 学修 事後 学修					これまでの学習内容の復習(5時間) 各講義に復習を行う(各講義後に1時間)										
教科書	医療情報科学研究所 編、病気がみえる vol.4 呼吸器(第3版) MEDIC MEDIA、2018 医療情報科学研究所 編、病気がみえる vol.8 腎・泌尿器(第3版) MEDIC MEDIA、2019															
参考書	エレイン N マリープ 著、人体の構造と機能(第4版)(医学書院)、2015 医療情報科学研究所 編、病気がみえる vol.2 循環器(第6版) MEDIC MEDIA、2021 医療情報科学研究所 編、病気がみえる vol.3 糖尿病・代謝・内分泌(第6版) MEDIC MEDIA、2019															
成績評価の方法及び評価割合	評価方法					割合	目標 1	目標 2	目標 3	目標 4	目標 5	目標 6	目標 7	目標 8	目標 9	目標 10
	課題レポート、学修成果物					20%	○	○	○							
	知識振り返り(小テスト)					10%	○	○								
	筆記試験					70%	○	○	○							
注意事項	病理学、臨床医学の復習を行って、講義に参加すること															
備考	なし															
リンク	URL															

担当教員の 実務経験の有無	○
教員の实務 経験	理学療法士
教員以外で 指導に関わ る実務経験 者の有無	○
教員以外の 指導に関わ る実務経験 者	なし
実務経験を いかした教 育内容	内部障害理学療法（呼吸、代謝）について、実際の症例を提示しながら、講義やディスカッションを進める。

ナンバリング		授業科目名(科目の英文名)					区分・【新主題】/(分野)															
H030B261		義肢装具学(Prosthetics and orthotics)																				
必修選択	単位	対象年次	学部	学期	履・限	担当教員																
必修	1	2	福祉健康科学部	後期		氏名 阿南雅也, 片岡晶志 E-mail anan-masaya@oita-u.ac.jp, mkataoka@oita-u.ac.jp 内線 6115, 7457																
授業の概要												ある部位の身体機能が一時的に低下あるいは永久に消失した際、その機能を身体外部から代償する方法が義肢装具である。本講義では、リハビリテーションにおける義肢装具の意義、歴史、現状について、また各義肢装具の種類・構造、機能などを学ぶ。そして、義肢装具のチェックアウトおよび義肢装具療法の基本知識、また補装具の支給体系について学ぶ。										
具体的な到達目標												DP等の対応(別表参照)										
目標1 リハビリテーションにおける義肢装具の重要性と役割を説明できる												1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	
目標2 義肢装具の種類・構造、機能を説明できる												○										
目標3 義肢装具のチェックアウトを説明できる												○										
目標4 義肢装具療法の目的および実態を説明できる												○										
目標5																						
目標6																						
目標7																						
目標8																						
目標9																						
目標10																						
授業の内容																						
1 装具総論 (阿南)																						
2 脊髄損傷の装具 (片岡)																						
3 関節リウマチの装具 (片岡)																						
4 脳卒中片麻痺の装具 part1 (阿南)																						
5 脳卒中片麻痺の装具 part2 (阿南)																						
6 整形外科治療装具・スポーツ障害の装具 (阿南)																						
7 末梢神経障害の装具、小児用装具 (片岡)																						
8 切断総論・切断のリハビリテーション (片岡)																						
9 義肢総論 (片岡)																						
10 下腿義足 (阿南)																						
11 大腿義足 part1 (阿南)																						
12 大腿義足 part2 (阿南)																						
13 股、膝、サイム、足部切断用義足 (阿南)																						
14 義手 (阿南)																						
15 その他の補装具 (阿南)																						
ラ A:知識の定着・確認												○ 授業開始時に前回分の小テストを行う。										
イ B:意見の表明・交換												○ 実際の臨床での事例などを交える。										
エ C:応用志向																						
グ D:知識の活用・創造																						
準備学修												教科書と事前にMoodleにアップした講義資料を用いて予習する(30h)。										
事後学修												教科書とMoodleにアップした講義資料や動画を用いて復習する(30h)。										
教科書												佐伯寛：標準理学療法学・作業療法学・言語聴覚障害学 別巻 義肢装具学、医学書院、2018										
参考書												伊藤利之・他：義肢装具のチェックポイント 第8版、医学書院、2014 澤村誠志・他：義肢学 第3版、医歯薬出版、2015 飛松好子・他：装具学 第4版、医歯薬出版、2016										
成績評価の方法及び評価割合												割合	目標1	目標2	目標3	目標4	目標5	目標6	目標7	目標8	目標9	目標10
学期末試験												80%	○	○	○	○						
小テスト												20%	○	○	○	○						
学期末試験はそれまでの出席回数が2/3以上の者により受験資格を有す。																						
注意事項												阿南担当分は「木曜1限」、片岡担当分は「木曜3限」にて実施する。 やむを得ない理由による授業欠席、学期末試験受験欠席のときは、必ず連絡のうえ必要な書類を提出し、許可を得る。										
備考												なし										
リンク												URL										

担当教員の 実務経験の 有無	○
教員の実務 経験	理学療法士、医師
実務経験を いかした教 育内容	理学療法士、医師としての実務経験をもつ教員が、臨床・研究・教育経験を生かして、理学療法士の臨床現場で多岐に用いられる義肢装具に関する教育を行っている。

ナンバリング		授業科目名(科目の英文名)				区分・【新主題】/(分野)						
H030B131		基礎臨床実習Ⅰ (Basic clinical practice Ⅰ)				臨床実習						
必修選択	単位	対象年次	学部	学期	履・限	担当教員						
必修	1	1	福祉健康科学部	後期		氏名 河上敬介、菅田陽怜、朝井政治、阿南雅也、川上健二、田中健一朗、萬井太規 E-mail: kkwakami@olta-u.ac.jp; hsugata@olta-u.ac.jp 内線 7735						
授業の概要 臨床実習担当者の指導の下、理学療法業務を見学し、理学療法士の役割について学ぶ。 さらに、理学療法対象者を取り巻く種々の職種との役割を学び、理学療法部門との協力体制に関して体験学習する。												
具体的な到達目標 DP等の対応(別表参照)												
目標1	理学療法対象者とのコミュニケーションの取り方について説明できる。	1	2	3	4	5	6					
目標2	理学療法士の役割について説明できる。	1	2	3	4	5	6					
目標3	理学療法対象者を取り巻く種々の職種とその役割について説明できる。	1	2	3	4	5	6					
目標4	理学療法部門と他職種との協力体制について、その必要性も含めて説明できる。	1	2	3	4	5	6					
目標5												
目標6												
目標7												
目標8												
目標9												
目標10												
授業の内容 1 実習事前ガイダンス (12月)・実習直前ガイダンス (2月) 2 1週間の集中実習 (1年次春季休暇中) 3 実習報告会 (実習終了後) 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15												
ラーニング	A:知識の定着・確認 B:意見の表現・交換 C:応用志向 D:知識の活用・創造	☐ 実習後の報告会にて、実習を通して気づいたことや学んだことを学生間で共有し知識の定着を図る	工夫	その他の								
時間外学習の内容と時間の目安	準備 学修 これまでに学習した知識を復習しておく (5時間) 事後 学修 実習で体験したことを振り返るとともに、実習での気づきや学んだことを整理する (5時間)											
教科書	特に指定しない											
参考書	特に指定しない											
成績評価の方法及び評価割合	評価方法	割合	目標1	目標2	目標3	目標4	目標5	目標6	目標7	目標8	目標9	目標10
	臨床実習評価	40%	○	○	○	○						
	実習報告書などの提出	20%	○	○	○	○						
	実習前・後指導への参画と理解	40%	○	○	○	○						
注意事項	履修規定に定める条件により履修が可能となる。原則として、全日出席で評価対象とする。また、実習の履修に問題が生じると予想される場合は、コース会議の審議を経て実習遂行が不可能となり、単位を修得できないことがある。											
備考	なし											
リンク	URL											

担当教員の 実務経験の 有無	☐
教員の実務 経験	理学療法士
教員以外で 指導に関わ る実務経験 者の有無	☐
教員以外の 指導に関わ る実務経験 者	理学療法士
実務経験を いかした教 育内容	教員以外の指導に関わる実務経験者